

明日をひらく地域活性化のための情報誌

地域づくり

2014

8

ISSN 1340-8917



特集 ■ 遺跡・歴史的建造物による地域づくり

本誌は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです



1 巻頭エッセー／創造的な復興に向けて

村井嘉浩（宮城県知事）

特集

遺跡・歴史的建造物による地域づくり

4	基調論文	遺跡・建造物と「遺産創造」	西山徳明（北海道大学観光学高等研究センターセンター長）
8	青森県	遺跡や「北前船」、奥津軽の歴史遺産を観光資源に	平野智也
10	岩手県一戸町	世界遺産めざす「御所野遺跡」を核にまちづくり	中村明央
12	秋田県小坂町	近代化産業遺産を活用し、交流人口の拡大図る	木村則彦
14	茨城県桜川市	歴史的な町並みを活用し、魅力あるまちづくり	木村智史
16	新潟県上越市	日本最古の映画館を再生、新たな観光スポットに	小沼 修
18	愛知県豊田市	重伝建地区・足助の町並み、住民主体で守る	多和田篤嗣
20	兵庫県	市民参加で竪穴住居復元プロジェクト	藤田 淳
22	鳥取県	弥生の村・妻木晩田遺跡を活かす	濱田竜彦
24	島根県松江市	市民の力で遺跡を保存、憩いの史跡公園に	川西 学
26	岡山県高梁市	赤い町並み・吹屋に新たな活気生み出す	伊達昌弘
28	高知県日高村	貴重な酒蔵を保存し、交流拠点に活用	松岡弘二郎
30	大分市	「大友宗麟プロモーション」で大分を活性化	加藤康寛
32	鹿児島県霧島市	「山ヶ野金山」を舞台にウォーキング大会	有川和秀

34 「富岡製糸場と絹産業遺産群」が世界遺産に
日本で18件目、近代の産業遺産では初 井上昌美

レギュラーレポート

- 36 リーダー塾修了者エッセー
全国地域リーダー養成塾に育てられて 今井良博
- 37 地域トピックス 神奈川県
特定地域の住宅に太陽光パネルを集中設置 山田健司
- 38 第1回地域再生実践塾 東京都八王子市
地域コミュニティの再生 炭谷晃男
- 40 移住・交流推進支援事業 和歌山市
魅力的な「ふるさと体験」を提供 湯川正純

地域づくり団体探訪 岩手県久慈市

42 特定非営利活動法人やませデザイン会議
住民主導の魅力ある郷土づくり

44 書籍紹介

首長の思い

45 都市間競争から都市間連携へ

伊東香織（倉敷市長）

48 センター通信

グラビア

2 遺跡・歴史的建造物による地域づくり

46 都道府県漫遊 【大阪府】

47 手前みそですが… 【群馬県川場村】



平安衣装をまといて熊野詣

（表紙写真は和歌山県那智勝浦町の青岸渡寺の三重塔。右に見えるのは那智大滝）
問い合わせ先…和歌山県地域政策課
（073-441-2371）
（写真提供…和歌山県）

表紙
紀伊山地の霊場と参詣道

（和歌山、奈良、三重各県）
世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の重要な要素として「文化的景観」があります。文化的景観とは、「自然と人間の営みによって形成された景観」です。紀伊山地の霊場は、古くから神々が宿る所として崇拝されてきた山々が、新しく渡来した仏教の影響のもと、宇宙や自然の中にひそむ神秘的な力を身につけるための山岳修行の場となり、参詣道も、そこを歩き、自然と触れあうこと自体が、すでに修行でした。つまり、「紀伊山地の霊場と参詣道」とは、社寺や道だけでなく、その周辺の自然やそこでの人間の営みも含めて世界遺産なのです。今年、「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界遺産に登録され10周年を迎えました。この世界の宝を確実に次世代に引き継ぐためには、文化財として保存するだけでなく、私たち一人一人がこの「文化的景観」のすばらしさを理解し、感謝と誇りをもって守っていかなければなりません。皆様の御理解と御協力をよろしくお願いいたします。



宮城県知事 ● 村井嘉浩

創造的な復興に向けて

東日本大震災の発生から3年が経過しました。これまでに国内外の皆様から多大な御支援をお寄せいただきました。改めてお礼を申し上げます。

宮城県震災復興計画では10年間の復興期間を三つの期間に区切り、第一期を復旧期（3年間）、第二期を再生期（4年間）、第三期を発展期（3年間）としました。震災から昨年度までの3年間は第一期の復旧期として、被災者の生活再建や失われた事業所の再建といった「くらし」と「なりわい」の復旧に最優先に取り組んでまいりました。

いまだに行方不明の方が1000名を超え、仮設住宅には8万人以上、県外避難を続けている方が8000名以上に及んでいる状況ではありますが、復興は着実に進んでいます。1111万トに及んだ災害廃棄物は平成25年度内に処理が完了しました。また、仙台塩釜港のコンテナ貨物取扱量はほぼ震災前の水準となり、農地の復旧面積、操業する漁船の数とともに約8割までに回復しております。これは、全国の自治体から多くの職員の派遣をいただき、懸命に復旧復興に携わっていただいた賜物であり、感謝の念に堪えません。

一方で、防災集団移転促進事業など、進捗に遅れが生じているものもあります。被災事業者の販路の回復、不登校児童・生徒や要介護者の増加など、対応の強化が必要な課題も山積しており、対策に取り組んでいるところです。

平成26年度からは新しいステージ（再生期）に入ります。私は震災直後から「抜本的な再構築」を掲げ、「この機会に日本のモデルを作り、宮城から全国に発信しよう！」と訴えてまいりました。そのため、再生期は被災者に重点を置いた施策を優先しつつも宮城県全体、東北全体を発展させることによって巡り巡って被災地に大き

な光があたるよう施策の種を蒔くことにも力を注いでまいります。

これまでも、震災前から高齢化による担い手不足などの問題を抱えていた水産業について、漁協に優先的に与えられていた漁業権を民間企業にも開放し、地元漁業者中心の法人への投資等を促進する「水産業復興特区」を実現することができました。これにより、事業者の経営や就業者の収入が安定し、新しい人材も得やすくなり、新たな日本の水産業経営のモデルになるものと考えております。

さらに、私は本年度の県の予算を「創造的復興スタート予算」と命名しました。仙台空港の民営化、大学医学部の創設、広域防災拠点の整備など震災がなければ実現できなかったことにも果敢に取り組む予算を編成したつもりです。

特に仙台空港の民営化は、昨年6月に国管理空港の民営化を可能にする「民活空港運営法」が成立し、今年4月には国の実施方針が決定され、我が国第1号に向けて大きく前進しております。6月には空港運営権者の公募が開始され、県による参加資格確認の後、国による選定手続きに移ってまいります。

民営化を契機に、利用者はもちろん、国内外の航空会社にとっても魅力あふれる地域づくりを進め、乗降客数600万人、貨物取扱量5万トという目標の達成に向けて取り組んでまいります。

宮城県では、市町村や地域と一体となり、復旧・復興に取り組む姿と、これまでのご支援に対する感謝の想いを国内外に伝えてまいります。また、創造的復興の実現に向けて全身全霊を傾けながら取り組んでまいりますので、引き続き御理解と御協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

遺跡・歴史的建造物による地域づくり



ボランティアガイドの案内で御所野縄文公園を散策する観光客ら

● 岩手県一戸町 (p10-11)



つがる市の木造駅。駅正面に亀ヶ岡遺跡から出土した「しゃこちゃん」こと遮光器土偶の巨大なモニュメントがある

● 青森県 (p 8 - 9)



歴史的建造物を活用し、まちづくりが進められている桜川市真壁の伝統的建造物群保存地区

● 茨城県桜川市 (p14-15)



明治43年建築の芝居小屋「康楽館」。今では貴重な観光スポットになっている

● 秋田県小坂町 (p12-13)



妻入り（奥）と平入り（手前）の建物が混在する足助（あすけ）の町並み

● 愛知県豊田市 (p18-19)



映画館「高田世界館」の外観。レトロな雰囲気を残す建物だが、内部はきれいに改修されている

● 新潟県上越市 (p16-17)



妻木晩田遺跡から望む日本海。高床倉庫などが見える。向こうに広がるのは美保湾
● 鳥取県 (p22-23)



兵庫県立考古博物館。隣接する大中遺跡では竪穴住居の復元プロジェクトが進んでいる
● 兵庫県 (p20-21)



赤味がかった独特の景観を見せる高梁市吹屋の伝統的建造物群保存地区
● 岡山県高梁市 (p26-27)



田和山史跡公園の全景。市民の力で遺跡の保存が決まった
● 島根県松江市 (p24-25)



戦国大名の大友宗麟像。大分市では大友氏をモチーフにまちづくりが進められている
● 大分市 (p30-31)



25年ほど前に閉鎖した造り酒屋。酒蔵は保存され、地域の交流の場に生まれ変わった
● 高知県日高村 (p28-29)



中学生による史跡案内。霧島市山ヶ野では金山跡などをめぐるウォーキング大会が開催されている
● 鹿児島県霧島市 (p32-33)



遺跡・建造物と「遺産創造」

―歴史遺産の普遍的価値高める活用を―



北海道大学観光学高等研究センターセンター長

● 西山 徳明

「遺産創造」という考え方

「現代社会は果たして、未来の遺産を創出できているか?」。これが私の問題意識である。

「世界遺産」も、身近な「おたから」も、価値の本質に優劣はない。そして「遺産」は、いつの時代にもつねに創造され続けてきたものであった。自然遺産であれ文化遺産であれ、「遺産」へ「リテージ」とは、単に「祖先から遺された財産」モノ」を指す静的概念ではなく、「子孫に資産」モノ・コトを価値としていかに遺すか」を問う動的概念である。

では、将来の遺産をいかにして創り出すのか? まずは、当たり前の日々の暮らしや地域空間の中に埋没してしまっている遺産を再発見し、それら

与えられた大切な遺産をできる限りの努力で真正にオーセンティックに継承することから始めねばならない。そしてそれら大切な遺産を真摯に見つめることで豊かな感性と価値理解の能力が育まれ、そこから、将来世代がさらに未来に伝えたいような新たな価値の創造が可能となる。

こうして現代の我々はもとより、将来世代が価値を創造し、さらにそれらを遺産として未来世代へ継承する営みが、私の考える「遺産創造」である。

遺跡と建造物の発見と喪失

一般に「文化財」や「文化遺産」と呼ばれるものには、天然記念物や名勝といった自然遺産や人間国宝や文化財保存技術などの無形遺産、近年注目されている自然に人が働きかけてつくられた文

筆者プロフィール

西山徳明氏（にしやま・のりあき）

北海道大学観光学高等研究センター センター長（文化審議会文化財分科会委員、国交省「日本らしく美しい景観づくりに関する懇談会」委員）

1961年、福岡市生まれ。京都大学工学部卒、同大博士課程単位取得退学、博士（工学）。九州大学教授および国立民族学博物館客員助教授等を経て、2013年から現職。専門は都市計画、文化遺産マネジメント、ツーリズム。国内各地の世界遺産登録や歴史文化基本構想策定の支援、JICA事業を通じたエチオピア、ヨルダン、パルー、フィジー等での観光開発国際協力に従事中。

化的景観なども含まれるが、本特集で取り上げられている遺跡と歴史的建造物は、こうした遺産のなかで最も数が多く、地域の暮らしに近い存在であると言える。本編では、この地域資源としてイメージされやすい遺産種別である遺跡と建造物（主に建築物）に焦点を当て、その大切さや保存・活用のアプローチの現代的意味について述べることで、特集に報告されている全国の優れた取り組み事例を理解する一助となることを期待する。

はじめに、遺跡と建造物の保護と喪失の現実について触れておきたい。遺跡については、日本の文化財保護法に、地下に埋もれて価値が顕在化していない文化財が知らないうちに破壊されないようにする仕組みがある。具体的には、保護法に「埋蔵文化財」は大切な文化財であると規定する一方、それは文化「財」そのものではなくそれが埋蔵されている「状態」であるとして、それらを含みもつ可能性のあるエリアを「埋蔵文化財包蔵地」として周知し、そこに関わる土地の開発に際しては原因者負担で緊急発掘調査を実施することとなっている。

現在、これら周知の埋蔵文化財は全国で約46万5000カ所あり、毎年約9000件の発掘調査が行われている。そして発掘された遺跡の99%以上が現状のまま保存できないと判断され、遺跡の記録だけを残す「記録保存」の後に破壊されている。幸いにも文化財としての価値が高いとされた遺跡については史跡として指定を受け、整備されて遺跡公園等として保存・公開されている。

関連図 歴史まちづくり法のパンフレットに見る「歴史的風致が失われる現状」

歴史的風致が失われる現状

維持管理に多くの費用と手間がかかること、所有者の高齢化や人口減少による担い手の不足等により、全国各地で町家等の歴史的な建造物が急速に減失し、良好な歴史的風致が失われつつあります。



景観にそぐわない近代的なビルが建設され、歴史的風致が損なわれている。



町家が壊され、空き地が目立ち歴史的風致が損なわれている。

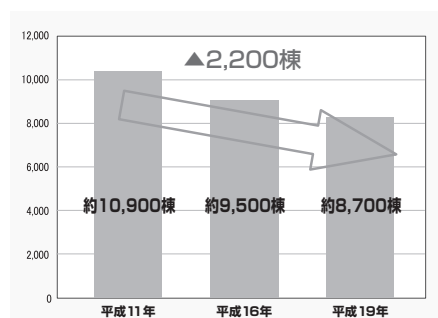


図1 金沢市のまちなかの例

8年間に、約2,200棟(全体の約20%)の歴史的建造物が失われている。

※出典:金沢市資産税課 (H19)

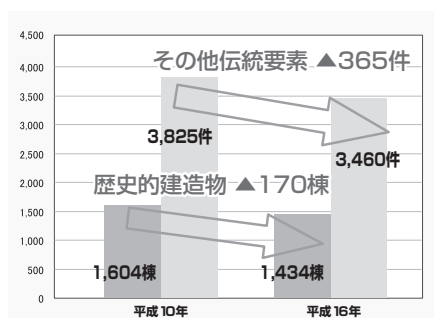


図2 萩市旧城下町地区の例

6年間に170棟(約10.6%)の歴史的建造物が失われ、その他伝統要素(塀、垣等)では、365件(約10%)が失われている。

※出典:九州大学大学院芸術工学研究院環境計画部門 (H16)

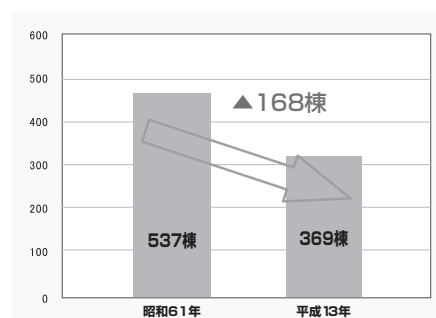


図3 台東区の例

15年間に、168棟(約31.3%)の住宅・店舗兼住宅などの戦前の住まいが失われている。

※出典:東京芸術大学・台東区 (H14)

また出土品の内、文化財と認められたものは有形文化財として資料館や博物館等に保存される。われわれがいわゆる「遺跡」と認知しているもののほとんどが、これら多くの発見の中、かろうじて破壊から免れた一握りの埋蔵文化財（であったもの）なのである。

一方で、地上にある建造物についてはどうであろう。これらは、すでに学術調査を終え価値が特定されたごく一部の少数エリート物件のみが指定や選定、登録されて保護されており、その他は以下のように、本来的には文化財として保護されるべき価値が誰にも知られないまま、急激に喪失していつているという事実がある。

文化庁がとりまとめた調査によると、山口県萩市旧城下町地区では、1998年から2004年の6年間で、伝統的建造物が1604棟から1434棟に減少（減少率10・6%）、非戦災の下町と呼ばれる台東区谷中地区では、1986年から2001年の15年間で、住宅、店舗兼住宅などを中心とした「戦前のすまい」が537棟から369棟に減少（減少率31・3%）、地方歴史都市である石川県金沢市では、1999年から2004年の5年間で、歴史的建築物が市全域で2万1496棟から1万9037棟に減少（減少率11・4%）したとの報告がある（前ページ図参照）。これら3事例は、地方の中核都市と小都市、首都圏と、全く現代社会におけるコンテクストが異なっているにもかかわらず、10年間で20%強の減少率という同一の事態を報告している。

歴史文化まちづくりをめぐる近年の動向

しかし、こうした遺産喪失の深刻な状況がある一方で、21世紀に入ってから歴史文化をいかしたまちづくりは大きく展開を始めた。景観法制定に始まり、2004年の文化財保護法への文化的景観の導入、2007年の文化庁による歴史文化基本構想の提言、2008年の歴史まちづくり法制定（文化庁・国交省・農水省）および文化財総合的把握モデル事業（文化庁）の開始、そして2012年の歴史文化基本構想策定技術指針（文化庁）の策定と、時代はうねりをあげて地域の歴史的ストックを活用したまちづくりへと動いている。文化財を保護法によって税金でまもることだけに終始せず、身近にあるより広範な遺産を発見し、様々なブレイヤー（市民、企業や民間事業者、NPOなど）が巧みに活用することで未来に継承していこうとするそのうねりは、まさに本特集に集められた事例のなかで確認できるはずである。

「死んだ遺産」から「生きた遺産」へ

次に、遺跡や歴史的建造物の活用を考える上で基本となる議論が世界遺産をめぐるユネスコ等の国際社会でなされているので触れておきたい。

これまで途上国では、多くの世界遺産級の文化遺産が政府の管理下、海外からの国際協力機関に

よる学術調査と修復事業を経て公園化され、海外観光客からの外貨獲得に貢献してきた。しかしこの過程で、長年培われてきた地域住民と遺産との様々な関係は往々にして断ち切られ、遺産サイトは研究者と観光客だけの場となってしまった。地域社会にとって、身近にあった遺産はまさに「死んだ遺産」となったのである。これに対する「生きた遺産」「リビングヘリテージ」という言葉がある。こうしてつくり出された地域社会と遺産との不幸な関係を、例えば住民参加型の観光開発を架け橋として再構築し、経済的裨益（ひえき）の創出に留まらず、住民の遺産への誇りや愛着、信仰心などを再生あるいは創造することで、「死んだ遺産」を、地域社会に意味をもたせ続ける「生きた遺産」にしていくべきであるという使い方がある。

「リビングヘリテージ」にはもう一つの使われ方もある。地域空間や建築物の部屋などの不動産空間を器と考え、その器とそこに詰めこまれた人々の暮らしや生業活動等の動産・無形の要素が渾然一体となった動的遺産に価値を見出す考え方で、いわゆる日本で言う歴史的集落や町並みのことである。この種の遺産は、その「生きている」という性格ゆえに、そこで暮らす人々の保護への自覚的参画なくして未来へ継承することはできない。

いずれのリビングヘリテージをめぐる議論においても、遺跡とそれに寄り添い見守っている市民、あるいは歴史的集落や町並みの中に住んでいる住

民と建造物や地域空間との関係をいかにして創造的なものにしていくかが問われている点に興味深い。遺産を生かした地域活性化を持続的なものにしていくには、単なる経済的な関係に留まらないこの創造的関係をいかにつくり出していくかが鍵となると言えよう。

地域活性化を超えた遺産の活用

遺産に国民や人類によって享受されるべきものという側面がある以上、それらは同時に観光資源としての資質を否応なくもつこととなり、遺産観光＝ヘリテージ・ツーリズムの対象となる。ICOMOS（国際記念物委員会・NGO）によって1976年に採択された「ICOMOS文化観光憲章」では、観光客を遺産の高潔性やとりまく環境を物的に脅かすものとしてとらえ、主に、遺産を訪れる観光客とそれを守ろうとする人々との緊張関係をいかに調整するかを遺産管理の最大の課題とした。しかしそれから四半世紀が過ぎた1999年、この憲章は「国際文化観光憲章」として改訂され、訪問者がその正しい意味（重要性＝significance）を理解できるよう、遺産に積極的にアクセスできる管理手法をとることを保護の主要な目的に据えるに至った。遺産保護に大衆レベルでの高い認識と支持がない限り、政策的にも資金的にも支持を受けることはできないと考えたのである。このことは、「遺産（モノ）と訪問者（ツーリスト）の関係制御」から、「遺産（モノ／コト）

とローカルコミュニティ（ホスト）と訪問者（ゲスト）の関係構築」へと、遺産とツーリズムに関する関係概念の大きな転換が起こってきたことを示している。

観光の役割とは、遺産として見出され大切にされている価値（意味）を、上手にまずは地域住民や国民に、そして訪問者である観光客等に解説＝インタープリテーションすること、すなわち価値へのアクセスを許すことであり、そのことがその観光資源である遺産に対する価値理解を深めさせ、理解者や支援者を増やすことにつながる。柵を造って遺産を破壊から守ろうとするだけでは、真の保護はできないのである。遺産を生かしたまちづくりのスタートは、こうした資源となる遺産のもつ普遍的価値（誰にでも理解できるように説明された価値）を、手を抜かずに説明すること、そして専門家だけではなく地域住民や国民にも共有された普遍的価値を高めるための活用方法に取り組むことである。

こうした遺産価値の普及、活用の方策としては、近年地域の自然資源や文化資源の保全・活用策として注目されているエコツーリズムやジオパーク、エコミュージアム等の取り組みとともに、地域の特色あるコレクションを有する美術館、博物館、歴史民俗資料館などを、改めてまちづくりの構想の中に位置付け、情報発信の要として活用を図っていくことが求められる。つまり、単なる経済行為としてではない文化交流を含む広義における観光（ツーリズム）の資源、あるいは景観づく

りや教育のための資源として位置づけることで、ただ消失を待っていた遺産に新たな価値を与え、活用する中で未来へ継承していくという考え方である。

「遺産創造」のために

地域や社会が、本質的な意味で観光の発展を目指そうとすれば、自らが有する遺産の価値とその活用可能性＝ポテンシャルを正しく認識し、その魅力を源に新たな遺産を創造していけるような個性的で誇りある将来ビジョンを描かねばならない。それには、遺産創造の主体となるべき民（市民）・産（民間）・官（行政）が、「遺したい資産」として「遺産」への発想の転換をはかり、それら多様な「遺産」の普遍的価値を説明できる専門家を養成するとともに、これら民・産・官・学の連携をコーディネートできる別次元の専門家を生み出す必要がある。

遺跡や建造物と社会との関係において、「死んだ遺産」を「生きた遺産」に転換するため、私たち大学が目指すべきは、こうした地域をまたぎ、国を超えて活躍できる専門家や、地域に寄り添って美しい国づくりの草の根を支える専門家を世に送り出していくことである。観光の創造とは価値の創造に他ならない、と私は考えるからである。

遺跡や「北前船」、奥津軽の歴史遺産を観光資源に ―新幹線開業もチャンスに交流人口拡大目指す―

青森県西北地域県民局地域連携部地域支援室主事 ● 平野 智也

豊かな地域資源

青森県の西北地域は、津軽平野に広がる水田、りんごやメロン、豊富な海の幸・山の幸など多様な農林水産資源と、先人達が築き、守ってきた立佞武多（たちねぶた）などの地域の祭りや世界自然遺産白神山



日吉（ひえ）神社。境内には安藤氏が庇護したとされる神仏習合の宗教施設の遺跡がある

地、斜陽館や津軽鉄道「ストーブ列車」など魅力あふれる観光資源を有しています。また、亀ヶ岡遺跡をはじめとする縄文、中世、近世に至る多く

の歴史遺産も豊富な地域であることから、これらの歴史遺産を活用して観光振興や地域づくりに役立てようという取り組みが進められています。そこで、今回は縄文晩期を代表する「亀ヶ岡遺跡」（つがる市）、中世に日本海屈指の湊として栄えた「十三湊（とさみなと）」（五所川原市）、江戸時代に湊に賑わいをもたらした「北前船」（鯨ヶ沢町、深浦町）の三つの歴史遺産について地域での取り組みをご紹介します。

歴史遺産を活用した地域づくり

(1) 遮光器土偶のふるさとつがる市

今から約1万3000年前、日本列島は縄文時代と呼ばれる時代が開いていました。つがる市には有名な遮光器土偶が出土したことで知られる亀ヶ岡遺跡をはじめ、日本海側では数少ない貝塚を有する集落遺跡、田小屋野（たごやの）貝塚、豊富な円筒土器が出土した石神（いしがみ）遺跡

など、縄文時代の貴重な遺跡が発掘され、今も地中深く眠っているとも言われています。

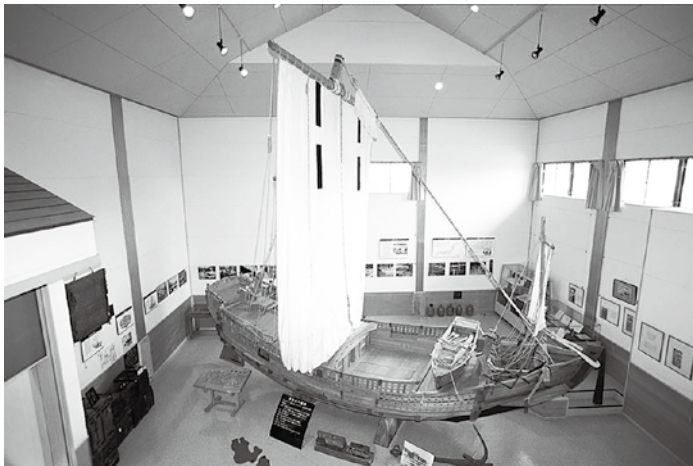
このつがる市で平成19年に設立され活動している民間ボランティア組織に「つがる縄文の会」があります。縄文文化の情報発信をすると同時に、地域住民の方々に地域が有する貴重な歴史資源に関心をもってもらうことを目的とし、また、「北海道・北東北の縄文遺跡群」の世界文化遺産登録を目指した取り組みを行っています。

毎年8月中旬には「JOMON 亀ヶ岡遺跡まつり」を開催し、「田小屋野貝塚ウォーク」や「亀ヶ岡遺跡を練り歩こう！ みんなのネプタ運行」を行っているほか、年度末には、学芸員による発掘調査の結果報告を兼ねたフォーラムを開催しています。

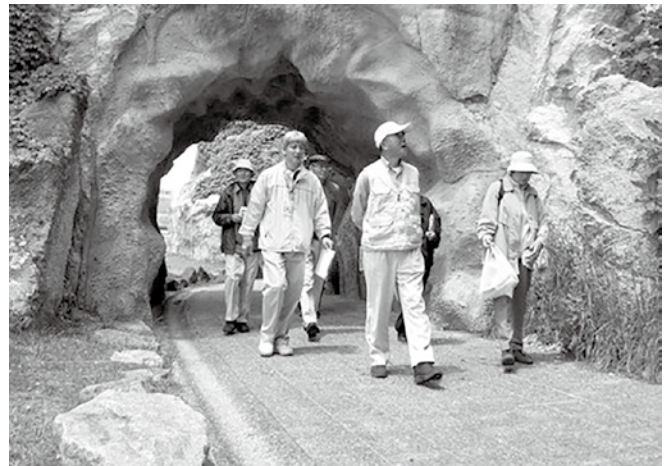
このほかにも、近年、学校の授業で地元について学ぶ機会が減ってきていることを受けて、小・中・高校生を対象とした勉強会も開いています。この勉強会を開くまでの子供達は遮光器土偶を見たことはあるが、自分達の住んでいる地域から発掘されたことも知らなければ、亀ヶ岡遺跡があることさえも知らなかったそうです。「つがる縄文の会」代表である川嶋大史さんは「亀ヶ岡遺跡が持つ多くの魅力を発信し、観光誘客を図るためにも、まずは地域の方々が遺跡に関心を持ち、地域全体で盛り上げていこうとする気運を高めていきたい」と熱く語っています。

(2) 地中に眠る安藤氏のロマン

現在、宍道湖（島根県）や小川原湖（青森県）と並ぶ日本有数のシジミ産地として知られる十三



深浦町の「風まち館」内に展示されている北前船の模型



深浦町の「風まち湊案内人」がガイドしている様子

湖（じゅうさんこ）一帯は、13世紀から15世紀にかけて、豪族・安藤氏が支配し、大規模に整備された港湾施設や居城、宗教施設などを伴う都市機能を有した中世都市を造り上げました。十三湊は近代化の波にのまれず、今も当時のままの状態で遺構や遺物が地中に埋まっており、港湾都市の遺跡として非常に高い保存状態を保っています。

この中世の港湾都市「十三湊遺跡」の観光ガイドをしている団体が「安藤の郷応援隊」です。十三湊は平成17年7月に国の史跡に指定されましたが、関係者の盛り上がりとは裏腹に地域の人々の関心は薄く、もっと地域の人々の関心をひきつけ、安藤の歴史を勉強しながら案内できる組織をつくりたいとの思いから、「安藤の郷応援隊」が設立されました。

ガイド活動のほかにも、地域の小学5～6年生を対象とした「ふるさと歴史教室」を開催。地域の歴史を学ぶことで自分達の住む地域に誇りをもってもらうことを目的に始まったもので、この「ふるさと歴史教室」で学ぶまでは自分の住む地域には何も誇れるものがなかったという子供達が、自分が住む地域に誇りを持つようになっていく手応えを感じているそうです。

また十三湖周辺の景観を整備する活動も行っており、安藤氏と関係が深かった奥州平泉にちなみ、桜を地域の人々と一緒に植樹し、千本植えることを目標にしています。植えた桜は、まだ花を楽しみほかに成長しておらず10年後くらいに花見ができるとのこと、その日が待ち遠しいものです。

(3) 動く総合商社「北前船」

江戸時代後期から明治にかけて、日本海西廻り航路で行き来した北前船（きたまえぶね）。行きは上方・大坂からさまざまな日常生活品を積み、帰りは蝦夷地（北海道）で買い付けたニシン・昆布・シメ粕などを積んで、途中の湊で商売をしながら航海していた。海路は、物だけではなく技や祭りなどさまざまな文化をも運んできました。

深浦町には、この北前船の歴史を訪れる方々に伝えることを目的に地元の有志で結成された、「風まち湊案内人」というガイド団体があります。北前船が運んだ技や祭りなど文化の軌跡をガイドと共に歩くことで当時の町の賑わいが聞こえてくるようです。また鯨ヶ沢町では北前船により伝わった京風の祭り「白八幡宮大祭」が1677年から始まり、今では4年に一度行われ、地域の人々によって綿々と受け継がれています。

北海道新幹線開業を大きなチャンスに

平成27年度末に西北地域に隣接する今別町に北海道新幹線「奥津軽いまべつ駅」が開業します。これを契機に奥津軽を訪れる方々に、食や自然だけではなく、時を超えた悠久のロマンも感じただけでなく、今回ご紹介したような、地域住民自らが故郷に埋もれている歴史を学び、それを地域の言葉で語っていくというような活動の一層の活発化が期待されています。

県としても北海道新幹線の開業を大きなチャンスと捉えて、地域の市町や関係団体との連携のもとで様々な観光資源を磨き上げ、さらなる誘客に努めていきたいと考えています。

世界遺産めざす「御所野遺跡」を核にまちづくり —住民参加で文化財を活用、地域を元気に—



一戸町教育委員会
御所野縄文博物館文化財係長

・中村 明央

文化財愛護精神の高い町

岩手県一戸町は岩手県の内陸北部に位置し、町の面積の70%以上を山林が占める典型的な山間地です。古くから文化財愛護精神の高い町で、昭和13年に「藤島のフジ」と「実相寺のイチヨウ」が国の天然記念物の指定を受けたのを皮切りに、数多くの文化財を指定、保存、活用してきました。人口1万4000人程の小さな町ですが、平成26年6月現在、国指定文化財11件、県指定文化財8件、町指定文化財47件を保有しています。

天然記念物「藤島のフジ」を活かす

一戸町小島谷（こずや）地域では、地域住民が主体となり「藤島のフジ」を活用した地域づくりを行っています。「藤島のフジ」は樹齢数百年と推定され、根回りが約4m、高さ約20mの巨大なフジで、春から初夏にかけて綺麗な紫の花をつけ

ます。名実ともに日本一のフジとも言われ、小島谷地域のシンボルになっています。

平成13年に小島谷地域振興会から「藤島のフジ」及び隣接する町指定のフジの保全と周辺整備の要望が町に提出されたのですが、町では地域の活性化に結びつけるためには、行政の取り組みだけでなく、地域住民や「藤島のフジ」に関心を持つ人々の多様な関わりの中で進める必要があると考えました。そのため当面の整備だけではなく、長期的に住民に関わっていただけるよう平成14年から専門家を招いてフジの管理の研修会を開催しました。現在は受講した住民が中心となって清掃等だけでなく、剪定（せんてい）や施肥などの日常管理も実施しています。

小島谷地域の住民による「藤島のフジ」の維持管理は、実に多様な効果をもたらしました。平成15年からは地域住民の主催で「藤まつり」を毎年開催しており、年々見学者が増え、今では地域の一大イベントになっています。

また、この「藤まつり」では、高屋敷神楽（平



奥州街道では毎年多くのウォーキングイベントが開催されている

成24年11月に岩手県無形民俗文化財に指定）や小島谷七ツ踊り（平成26年2月に一戸町無形民俗文化財に指定）が披露されていますが、住民の日頃の練習の成果を見ていただく機会になるとともにこれら文化財の伝承活動の活性化にもつながっています。

国指定史跡「奥州街道」も活用

平成21年に国史跡になった「奥州街道」についても、指定前から町では史跡として保護し、次世代に継承していくためには、地域住民や「奥州街道」に関心を持つ人々の参加が必要だと考えました。

「奥州街道」の活用に関しては現在三つの地域



春と秋の年2回実施している御所野クリーンデー。毎回200人程の参加者がある



ボランティア団体「発掘友の会」は毎月1回、御所野縄文公園内の草取りを行っている

団体が活動しています。

「末の松山振興会」では平成15年から継続して街道の草刈りや清掃、アジサイの植栽、ウォーキングイベントなどを行っており、街道沿いの浪打峠が日本ウォーキング協会の「美しい日本の歩き」たる道500選」に選ばれるきっかけにもなりました。

また「関屋・女鹿口振興会」では平成18年に百姓一揆の集結地への説明板設置や桜の植樹などを実施し、振興会が解散した後も町内会が独自に文化財の保護に取り組んでおり、街道の草刈りや清掃だけでなく、平成20年からは全国的にも珍しい文化財の町内会による指定を行っています。

さらに「高屋敷町内会」では、街道の草刈りや街道沿いの井戸の復元に取り組んでいるほか、地域に残る文化財を自分たちの手で調査して説明板を設置。地蔵祭りや虫追い祭りなど途絶えていた年中行事を復活させ、盛岡や八戸からのツアー客

を毎年地域で受け入れており、平成19年度には岩手県認定の「元氣なコミュニティ100選」に選ばれています。

◆◆◆ 「御所野遺跡」を核にまちづくり 世界遺産登録に向け様々な活動も

一方、御所野遺跡は、平成20年度に世界遺産暫定リストに掲載された「北海道・北東北を中心とした縄文遺跡群」の構成資産の一つです。縄文時代中期後半の大規模なムラのあとで、平成5年に国史跡に指定されています。

史跡整備を経て平成14年春に御所野縄文公園としてオープンしており、平成25年度までの12年間の総入場者は約40万人に上っています。

町では史跡指定地7万5842平方メートルだけでなく、周辺環境を保全するため、周辺の土地約7万5000平方メートルも公有化しており、平成22年に策定した『御所野遺跡植生復元整備計画書』に

基づいて、現在も継続して周辺の土地の針葉樹を伐採し、縄文時代の植生である広葉樹林に近づけるなどの整備を進めています。また、発掘調査も継続して実施しており、公園に隣接する「御所野縄文博物館」の展示内容をその成果を取り入れた最新の情報に替え、今年4月にリニューアルオープンしました。

一戸町教育委員会では、「御所野遺跡」を核とした町内の文化遺産を活用したまちづくりの基本方針を示した『一戸町文化遺産活用計画報告書』を平成24年度に作成。現在この計画書に基づき町の関係部署が連携して、御所野遺跡の世界遺産登録に向けた啓発活動のほか、文化遺産周辺の環境整備、観光コースの設定など様々な事業を展開しています。

◆◆◆ 住民参加型で文化財を活用 町全体の活性化を

文化財のとらえ方、具体的な保存・活用の考え方は各地域で異なり、従来の保存整備に重点を置く市町村や文化財の活用重点を置く市町村など実に多様ですが、活用については講演会等を開催し調査で明らかになったことを住民に還元していく成果還元型の活用だけでなく、地域住民が自ら動き、行政は人と人、人と文化財を結び付ける住民参画型の活用が求められる時代になってきています。

行政主導での文化財の観光への利用等も否定できませんが、観光だけが肥大化すると住民が置き去りになってしまい、住民が離れ失敗することが危惧されます。文化財の活用にもっとも大切なことは、多くの地域住民に参加していただくことだと思います。

御所野遺跡の世界遺産登録の推進活動がこれから本格化していきますが、御所野遺跡だけではなく、町内各地域の文化財が地域住民参画形式で活用され、町全体を活性化させることを目指し取り組んでいきます。

近代化産業遺産を活用し、交流人口の拡大を図る ―十和田湖と明治の香り漂う町・小坂―



小坂町観光産業課課長補佐

・木村 則彦

鉾山が閉山、「観光立町」を宣言

秋田県小坂町は江戸時代以来の歴史ある鉾山の町であり、明治時代以降に近代技術の導入により大きく発展した鉾山の周辺地域には、歴史的建造物を含む鉾山の面影が強く残されています。

国内の鉾山が相次いで閉山する中、平成6年には小坂鉾山も全て閉山し、製錬業のみが稼働する状態になりました。このような状況を踏まえて、



アカシアの並木が美しい「明治百年通り」

「明治百年通り」を整備、 康楽館などが重文に

町は、康楽館の整備を契機に、産業遺産等の歴史的建造物を活用し、「明治の香りのする近代化産業遺産を活用したまちづくり」を推進することになりました。康楽館前の道路はアカシア並木を保存しつつ、明治期の文化やモダンなセンスを感じることができる「明治百年通り」に整備しました。毎年6月には町民手作りの「アカシアまつり」が

開催され、町内外から多くの観光客が訪れています。

平成13年には、「明治百年通り」に明治38年建築の「小坂鉾山事務所」が移築・復元され、資料館・物産品ショップ等の観光施設として利用されています。そして、平成14年には「康楽館」「小坂鉾山事務所」が国の重要文化財に指定されました。

「明治百年通り」は、鉾山文化がもたらした歴史文化と、季節ごとの美しい花々などの自然とが調和した癒しの空間となっています。また平成13年度には環境省の「かおり風景100選」に選ばれたほか、平成17年度には国土交通省から都市景観大賞「美しいまちなみ賞」、さらに平成18年度には町民が手づくりで取り組んできた事業が評価され、国土交通省から「手づくり郷土賞（地域整備部門）」を受賞しました。

「観光地」に成長、 住民も魅力向上に貢献

こうして明治百年通りは当時の雰囲気を感じられる個性的な空間となり、十和田湖と合わせて平成14年には年間140万人が訪れる観光地となりました。また、これらの整備が契機となり、地域住民との協働型の観光まちづくりが進められています。

平成15年には、町がクリスマスローズの花苗450株の無償譲渡を受けました。住民有志らがこれを康楽館前に植え、これをきっかけに平成16年3月には「フラワーボランティアの会」が発足、明治百年通りを守り育む担い手となっています。会員の熱心な活動に加え、企業による苗や資材、

労力の無償提供により、今ではクリスマスローズが約5000株に増えました。また、多様な花々の植栽や花壇の増設を行い「明治百年通り」の魅力向上を図っています。

◆◆◆ 交流人口拡大に向け課題も

しかし、現在の小坂町は産業構造の変化により若者が減少していることから、定住人口を基本とした町の振興策を考えることは非常に難しい状況です。

このため町では、既存の観光資源である「十和田湖」や「康楽館」「小坂鉱山事務所」を核とし

て観光による交流人口の拡大を図ってきましたが、近年は観光客が大きく落ち込んでいる状態です。こうした状況を踏まえ、改めて交流人口の拡大を図り、地域の雇用や経済活動の活性化に結びつけることが大きな課題となっています。

◆◆◆ 旧小坂鉄道を核に新たなにぎわいづくり

こうした中で、町が新たな観光資源として注目し、活用を図っているのが旧小坂鉄道です。小坂鉄道は明治41年に大館―小坂間が開通し、明治42年には小坂鉄道(株)の発足とともに営業が開始されました。同鉄道はもともと小坂鉱山の鉱石輸送



フラワーボランティアによる植栽作業



観光客にぎわう「小坂鉄道レールパーク」
(ランドオープンした平成26年6月1日)

など貨物鉄道として敷設され、旅客営業もしていましたが、車社会の到来とともに利用者が減少の一途をたどり、平成21年4月、100年の歴史に幕を閉じました。

町は廃線が見込まれた時点で新たな観光資源として活用するための検討を始め、平成23年10月、「明治百年通りにぎわい創出基本計画書」を作成、既存の観光資源と旧小坂鉄

道の観光活用を組み合わせ「明治百年通りにぎわい創りプロジェクト」を策定しました。

このプロジェクトの目玉は「小坂鉄道レールパーク」です。明治百年通りの起点となる旧小坂鉄道小坂駅周辺を「レールパーク」として整備し、線路や設備を利用して子供から大人まで楽しめる施設として平成26年6月にランドオープンしました。

ここではレールバイクの乗車体験やディーゼル機関車の運転体験ができるほか、珍しい車両や当時の機関車を見ることができま

す。オープンに先立ち、平成24年からは明治百年通り沿線で、レールバイクの運転体験を行いました。また、平成25年の「小坂・鉄道まつり」では国内でも珍しいディーゼル機関車の運転体験を初めて行いました。そして、現在は家族連れや遠方からの鉄道ファンで賑わっています。

一方、鉄道愛好家などによって自主的な小坂鉄道の保存活動も湧き起こり、平成8年からは毎年10月の「鉄道の日」に合わせて、実行委員会により鉄道の日イベントが開催されています。平成25年には小坂鉄道保存会も結成されました。

このように国立公園十和田湖と歴史ある鉱山の町・小坂では明治の近代化産業遺産を活用し、魅力ある観光まちづくりを推進しています。多くの皆様に十和田湖と合わせ「小坂鉄道レールパーク」と「明治百年通り」を観て、学んで、体験していただき、明治の香り漂う景観とともに、世界に誇る日本の近代化産業遺産を体感していただければ幸いです。

歴史的な町並みを活用し、魅力あるまちづくり —家々にひな人形飾り、観光客もてなす—



茨城県桜川市教育委員会文化財課主任

● 木村 智史

歴史的建造物が豊富な真壁地区

桜川市は茨城県西部に位置する人口約4万5000人の筑波山麓にある自然豊かな地域です。平成17年に岩瀬町、大和村、真壁町が合併し、桜川市が誕生しました。中でも真壁地区（旧真壁町）には、見世蔵や土蔵など歴史的建造物が数多く存在していたため、それらを活用した住民主導のまちづくりが進められています。

歴史的町並みを保存、 重伝建地区に選定

昭和60年代から真壁地区では、歴史的建造物が相次いで取り壊され始めました。その姿を目の当たりにした住民有志が歴史的建造物を何とか後世に残そうと保存に向けて活動を開始します。

そこで目を付けたのが平成8年の文化財保護法の改正で導入された「登録文化財制度」でした。行政（当時の真壁町）へ登録文化財制度を活用す

るよう働きかけ、行政がそれを受け入れる形で歴史的建造物の保存がスタートしました。登録数100棟を目標に、平成11年から取り組み始め、同年に4棟を登録したのを皮切りに平成17年までに104棟を登録。その当時、登録文化財の数が京都市、愛知県大山市に次いで全国第3位になり、登録文化財の多い町として注目を集めました。

また、登録文化財制度に取り組み一方で、真壁城（現在は城跡で、国指定史跡）の城下町として発展してきた町並みを保存するため、歴史的建造物を点として保存するだけではなく歴史的町並み、面として保存しようという気運が住民のなかで高まりました。そこで、町並み保存の手段の一つである伝統的建造物群保存地区（伝建地区）制度の導入に向けて平成15年から17年までの3年間、調査を行い、平成21年に伝建地区を都市計画決定し、平成22年6月には全国で87番目の重要伝統的建造物群保存地区（重伝建地区、17・6ハシ）として国に選定されました。

町並みを活用、家々にひな人形 10万人が訪れる大イベントに

住民主導で行われてきたまちづくりは町並み保存だけにとどまらず、平成15年、冬の寒い時期に真壁を訪れてくれた人々のために、各々の家や店先にひな人形を飾り、来訪者を「おもてなし」しよう、歴史的な町並みを活用した「真壁のひなまつり」という新たなイベントが誕生しました。

最初の年は、ひな人形を飾った家は21戸、来訪者は約1万3000人でした。しかし、年々ひな人形を飾る家、来訪者ともに増え、今では約150戸の家にひな人形が飾られ、ひなまつり期間の1カ月（2月4日～3月3日）で約10万人の観光客が訪れるようになりました。こうして「真壁のひなまつり」は、真壁地区を代表する大きなイベントになっています。



建物の入り口にずらりと雛人形が飾られ、毎年大勢の観光客で賑わう真壁のひなまつり



国立小山高専と共催した土壁塗りワークショップの様子。土壁塗り（荒壁打ち）に子どもたちもチャレンジ



素屋根をかけて本格的な土蔵修理が行われている伝建地区内の修理工事の様子

◆◆◆ 東日本大震災で甚大な被害 建物修理、職人確保に大きな課題

平成23年3月11日の東日本大震災は、東北地方だけではなく、ここ真壁の歴史的建造物の約9割に甚大な被害を与えました。しかし、重伝建地区に選定されていたことで、文化庁からの手厚い補助を受け災害復旧事業を開始し、現在の進捗率は約4割です。

復旧が遅れている最大の原因は、伝統工法での復旧を行っているためです。近年、土蔵を修理する仕事は極端に減ってしまい、土蔵の修理経験のある左官職人が近隣市町村も含めてほとんどおらず、職人の確保が困難な状況にありました。

しかし、平成14年と15年に「ふるさと文化再興事業」の一環として行った真壁左官教室の講師であった宮沢喜一郎先生が当時の生徒達に声をかけ、土蔵修理を支援してくれたこともあり、徐々に土蔵の修理が進み始めています。そんな中、土蔵修理の技術を教えてくださった宮沢先生が今年の2月に他界されました。これまでの先生の功績を称えるとともにご冥福をお祈りし、先生の願いであった真壁の早期復興を目指して、行政として最大限の支援をしていきたいと思っています。

一方、伝建地区外の登録文化財については、元々修理費に対する補助制度がなかったため、国土交通省の街並み環境整備事業の採択を受け、修理費の補助を開始しました。こちらは伝建地区とは違い伝統工法ではなく在来工法での復旧も可としているため、よりスピーディーに修理が進み、今年度で事業が完了する見込みとなっています。

今回の震災で、歴史的建造物の保存には欠かすことができない伝統工法を習得した職人の高齢化と不足を痛感するとともに、こうした職人の育成・確保が今後の大きな課題であることが浮き彫りになりました。

◆◆◆ 文化財修理に市民も参加

平成25年度からは市所有の登録有形文化財の修理工事を実施しています。

元々この辺りの歴史的建造物の建築には近隣住民の協力を得て行われていた作業がありました。その作業は、竹木舞掻き（土壁の下地を竹で作る作業）と荒壁打ち（壁に泥を塗る作業）などです。

今回の修理工事では国立小山高専と共催で竹木舞掻きと荒壁打ちのワークショップを計6回開催しました。ワークショップには地元小学生や住民、学生、建築士会の方などが参加しましたが、修理に携わった建物が後世に残ることで、建物への愛着、町並みへの誇りが芽生え、町並み保存に対する意識がより一層高まることを期待しています。

◆◆◆ 今後の展望

町並みを保存・活用するために選択した伝建制度。今後、町並みの保存と活用をうまく両立していくためには多くの課題を抱えています。これから一つ一つ解決していき、より魅力ある町並み景観を形成し地域が活性化できるよう、住民と行政が一体となってまちづくりに取り組んでいきたいと考えています。

日本最古の映画館を再生、新たな観光スポットに ―歴史的建造物を活用した市民主体のまちづくり―



上越市自治・市民環境部文化振興課歴史資源係 ● 小沼 修

越後の伝統と文化が薫るまち

上越市は、新潟県の南西部に位置し、四季折々の豊かな自然を有する海・山・大地に恵まれ、歴史や文化に彩られた魅力あふれるまちです。古くから越後の政治・文化・経済の中心地として、また、交通の要衝として栄え、現在も重要港湾である直江津港や北陸自動車道、上信越自動車道のほか、平成27年春には北陸新幹線の開業が予定されるなど、高速交通網が整備されています。

古く中世には国府が置かれ、戦国の武将・上杉謙信公が春日山を居城とし、城下には多くの人が集まり繁栄したと伝えられています。江戸時代初期に春日山城は廃止され、現在の直江津地区に福島城が築かれたが徳川家康の六男・松平忠輝公が高田に城を築いたため、城下町も高田に移り、本年は高田開府400年の記念すべき節目の年を迎えました。

歴史的建造物の整備に補助制度

上越市は、歴史と文化と史跡の宝庫であり、文化財は国指定、県指定、市指定を合わせて360件と県内最多です。この他にも雁木に象徴される雪国文化をはじめとして多彩な歴史的かつ文化的営みを感じさせてくれる歴史的建造物が残されています。

この貴重な地域の宝を後世に残していこうと地元町内会や活動団体が創意工夫しながら積極的に歴史的建造物等を保全・活用する活動が近年活発になってきました。市では歴史的建造物を活かした市民主体のまちづくり活動を支援するため、新たに基金を創設し、市民団体などが行う歴史的建造物等の整備に要する経費に対して市が補助金を交付する「歴史的建造物等整備支援事業」を平成21年度から開始しました。

支援事業の仕組みと助成概要



整備前の高田世界館の内部を確認する支援事業の選定審査会メンバー

この事業では、市民や企業等の皆さんからの寄付金、一般財団法人民間都市開発推進機構からの拠出金、市のまちづくり基金からの繰入金金を「上越市歴史的建造物等整備支援基金」に積み立て、その資金を活用し、市民団体等が自主的に行う歴史的建造物等の保全・改修に係る事業に要する費用に対して助成を行うこととしています。

この事業は、歴史的建造物等を所有する者等が行う歴史的建造物等の保全または改修に係る事業で、市民の主体的なまちづくり活動により、地域コミュニティの形成に役立てるものであることを助成要件としています。

また、補助対象事業として適当かどうかの認定は、専門的な見地に基つき公平・公正を確保する観点から、建築や歴史の専門家5人で構成する「上越市歴史的建造物等整備支援事業選定審査会」で公開審査を行い、その結果を考慮した上で、市長が認定の可否を決定します。

補助率等については、補助対象事業に要する費



整備後の「高田世界館」の内部。座席などが取り替えられ、きれいに改修された



整備される前の高田世界館の内部



改修工事の様子

「高田世界館」は、当市の高田地区にある100年も続いている日本で最も古い映画館です。建物は、明治44年に劇場「高田座」として建てられ、以来90年余も映画館として営業を継続して現在に至っております。外観や内部に当時の趣をそのまま残し、高田の町の繁栄を今に伝えるレトロな建物です。平成21年4月、市民有志からなる「NPO法人街なか映画館再生委員会」が建物の譲渡

用に4分の3を乗じて得た額とし、一つの認定事業につき750万円が上限となります。なお、補助金の交付は事業実施主体の資金調達面に配慮し、一つの認定事業につき、1年度当たり1回とし、3回を限度としています。

事業を創設した平成21年度から25年度まで計6件、総額で4000万円超の補助金を交付しています。支援を受けた市民団体等は、整備した歴史的建造物等を核にして、地域の歴史、文化を深める特色あるまちづくり活動を展開しています。

◆◆◆ 生まれ変わる文化遺産 市民の力で日本最古の映画館を再生

事業の取り組み事例の一つとして、平成21年に採択された「高田世界館改修整備」事業を紹介します。

を受けて、「現役最古級映画館」を、高田世界館として再生するため、歴史的建造物等整備支援事業を活用し、整備を行いました。

老朽化した座席の張り替えと土間床の改修、老朽危険箇所の修理、冷暖房機器の整備を行った後は、自主企画の映画上映のほか、コンサート、講演会、落語など周辺の雰囲気を活かした地域の人や来訪者が楽しめるイベント開催を通じ、新たな観光スポットとして、まちなか回遊の促進や市街地の活性化に効果がありました。

この「高田世界館」は、平成21年に経済産業省から「民力の高まりに寄与した大衆娯楽」にかかわる産業遺産と評され、近代化産業遺産に認定されたほか、平成23年には国の登録有形文化財に登録されています。

◆◆◆ 地域固有の魅力を磨き上げる

このような取り組みのほか、古民家や近代遺産など多くの歴史的建造物が再生・活用され、上越の大きな魅力となっています。

歴史的建造物を活かしたまちづくりには、市民自らが自分の地域をよく知り、地域に誇りと愛着を持ちながら積極的に参画することが欠かせません。そしてその精神や取り組みを次世代へバトンタッチしていくことが大切です。

市では引き続き、市民に寄り添いながら、この事業を通じ、歴史資源を活かしたまちづくりを市民とともに進め、文化振興や観光振興などと連携し、賑わいづくりなど地域の活性化を図っていきたいと考えています。

重伝建地区・足助の町並み、住民主体で守る

―イベントで観光誘客、まちづくりの担い手も育成―



豊田市教育委員会文化財課担当長

・多和田 篤嗣

紅葉の名所・香風溪
「郷土を愛する心」が原点

足助（あすけ）の町並みのある豊田市は愛知県中央部に位置する人口42万人の中核市で、面積は918・47平方キロと県内で最も広く、森林が市域の約7割を占めています。足助で最も有名な香風溪（こうらんけい）は、全国から年間約100万人の観光客が訪れる紅葉の名所です。香風溪は、大正12年頃から昭和にかけて、足助の住民がモミジや桜を奉仕作業で植えてできたものです。この「時代を見越した郷土を愛する心」こそが、足助のまちづくりの原点といえます。

住民主体で町並み守る
重伝建地区に選定

香風溪に隣接する足助の町並みは、尾張・三河から信州を結ぶ伊那街道（中馬（ちゅうま）街道）の重要な中継地にあたり、物資運搬や庶民通行の要所として栄えた商家町です。

町並みの成立は定かではありませんが、安永4年（1775年）の大火で大部分が焼失しています。町並みは大火直後から再建され、今も江戸時代中期から明治末期までに建てられた約700棟の建物が残っています。足助の町並みの特徴は、平入りと妻入りの建物が混在していることで、防火を意識したいぶし瓦の棧瓦葺きの屋根や、2階を漆喰（しっくい）で塗り籠めている建物が多くみられます。

昭和50年に始まった町並み保存運動以来、足助の住民は自主的な規制によって、商家や民家が町並みに調和するように新築・改築し、町並みを守ってきました。そうした努力が実り、足助の町並みは、平成23年6月に重要伝統的建造物群保存地区（重伝建地区）に選定されました。

「たんころりん」と「中馬のおひなさん」
町並み活用イベント、観光客もてなす

香風溪の紅葉の見頃は11月に限られているため、年間を通して観光客に足助に来ていただくこ

とは、長年の課題でした。そこで、足助の住民は香風溪に隣接する足助の町並みを活用したまちづくりを行ってきました。

毎年2月上旬から3月上旬までの約1カ月間開催される「中馬のおひなさん」は、平成11年から始まりました。中馬街道の中継地として栄えた足助の町並みを舞台に、各々の商家や民家にある江戸時代のおひなさんから最近のおひなさんまで、様々なおひなさんが中馬街道に面して飾られます。観光客は、いろいろなおひなさんを見たり、その家の方からおひなさんの歴史や建物の歴史などを聞いたりして、町並みを楽しく散策しています。

また、毎年8月上旬には、「たんころりん」が開催されます。「たんころりん」とは、竹で編んだ籠に和紙を貼って油壺にかぶせた行灯のことです。この「たんころりん」を足助の町並みに灯すイベントは、平成14年から始まりました。

「たんころりん」の籠は、足助の竹を使って住民



中馬のおひなさん。足助の町並みを舞台に、様々なおひなさまが飾られる



重要文化財の旧鈴木家住宅内での小学生のワークショップの様子。昔のかごを体験



8月上旬に開催される「たんころりん」。家々の軒先に行灯が並べられ、夏の夜に風情のある町並みが出現する

が手づくりで編み、和紙は香風溪にある昔の生業を演じている三州足助屋敷で作られた手漉（す）き和紙を使い、地域資源を活用して、足助の住民

が主体となって取り組んでいます。イベント期間中は、毎日夕方になると住民が道路に水をまいて暑さを和らげ、「たんころりん」を並べ、観光客は昼間とは異なる町並みを楽しんでいます。

このふたつのイベントは、住民が町並みでの暮らしを楽しむために始めたものですが、これまで人通りの少なかった町並みに多くの観光客を招き、まちの人の心に活気を取り戻しました。

◆◆◆ 民家の内部を公開するイベントも

重要伝統的建造物群保存地区の選定をきっかけに、町並みという地域資源を活用した新たな取り組みが行われています。

毎年11月に開催される「あすけうちめぐり」は、平成22年から始まり、普段は見ることのできない町並みの民家の中を見ることができイベントです。イベントでは、事前に町並みの歴史や特徴を勉強した地元の高校生や中学生が、観光客を案内しています。現在、足助の町並みの中では内部を常時公開している民家がないため、この機会に多くの観光客が訪れます。

◆◆◆ まちづくりの担い手を育成 町並みサポーター制度も導入へ

これまでは、イベントを中心にしたまちづくりを行ってきましたが、イベント以外にもこれからのまちづくりの担い手を育てる取り組みを進めています。

平成25年から足助の町並みの価値と魅力を次世代に伝えるために、地元の小学生や中学生を対象

に体験型ワークショップを始めました。昨年は、小学校の低学年は「スタンプリー足助のまちをしらべよう!」、中学年は「古い道具と昔のくらし、残したいもの伝えたいもの」、高学年は「古地図を持って、旧街道を歩こう!」をテーマに楽しみながら町並みのことを学びました。

中学校では3年生が「『足助にこりんかるた』を作ろう!』というテーマで足助のことを調べて、読み札の文章と絵札の解説文を自分たちで書き、絵札の絵も自分たちで描きました。このかるたは市販され、地元の方をはじめ多くの方に楽しんでいただいています。

また、今年は足助町並みサポーター制度を発足させます。足助の住民以外の方で足助の町並み保存に関わりた方や足助ファンの方と、足助の住民が一緒になってアイデアを出しながら、汗をかきながら町並み保存を進める取り組みを始めます。

◆◆◆ 「足助らしさ」をめざして

伝統的な建物の修理が行われるとともに、道路脇の電線や電柱がなくなり、道路も新たに舗装され、町並みは大きく変化しています。これからも景観や町並みの保存だけでなく、空き家を活用した定住対策などによって人が住み継ぐとともに、観光などの地域の活性化につなげることを目指し、足助の住民自らが主体となって、自分たちの暮らしや伝統を守りながら、歴史を感じさせる「足助らしさ」のある魅力あるまちづくりを進めていきます。

市民参加で竪穴住居復元プロジェクト ―兵庫・大中遺跡、弥生時代の集落景観再現へ―



兵庫県立考古博物館総務部企画広報課長・学芸員・藤田 淳

新しいスタイルの博物館

「だれもが、いつでも、どこでも博物館の活動に主役として参加できる」―そんな新しいスタイルの「参加体験型博物館」を目指し、平成19年10月に兵庫県立考古博物館がオープンしました。播磨町という兵庫県の臨海部にある小さな町に誕生した当館は、県内の遺跡から出土した考古資料を活用した様々な事業を展開し、「こうこはく」の愛称で親しまれています。

勾玉（まがたま）作りや火おこしなど「毎日できる古代体験」、全国各地の古代体験が一堂に会する「考古博・古代体験秋まつり」（平成26年度からは全国古代体験フェスティバル）、県内の考古系資料館等と連携した「ふるさと発掘展」など、他の歴史系博物館にはない事業が目白押し。当館で、ひとときユニークな事業がここで紹介する竪穴住居復元プロジェクトです。

市民参加で竪穴住居を復元 弥生時代の集落景観めざす

当館の前には弥生時代の集落跡である史跡大中遺跡（播磨大中国古代の村）が約4万平方メートルにわたり広がっています。

昭和37年に地元の中学生により発見された大中遺跡は、その後の調査で弥生時代中期～古墳時代中期の大規模集落であることが判明しました。遺跡が最も栄えた弥生時代後期には円形や方形、六角形、長方形など様々な形の竪穴住居があることが特徴で、中国鏡の破片も出土しています。昭和42年に史跡指定、昭和49年からは史跡公園として公開され、緑豊かな公園として市民の憩いの場となっています。

竪穴住居は開館時には5棟が復元されていました。しかし、広い敷地の公園内では遺跡らしさに欠け、当時の集落景観の復元という観点からも、さらなる増築が必要と考えられていました。

竪穴住居復元プロジェクトは、その復元を業者



竪穴住居の復元に向け木組みを行う学生やボランティア

任せではなく、市民参加の体験プログラムとして実施しようという取り組みです。

様々な団体が復元事業に協力 明石高専の学生も活躍

市民参加で竪穴住居を復元すると言ってもその実現には様々な問題があります。特に、

- ① 建物の骨格となる木材の調達
- ② 屋根に葺（ふ）く茅（ヨシ）の調達
- ③ 作業を担う人員の確保

という三つの課題は、どうしてもクリアしなければならぬものでした。それを解決に導いたのが、県内各地で様々な活動に取り組むグループとのネットワークでした。

屋根葺きの様子



兵庫県立考古博物館の前で行われた音楽イベント。多彩な催しが大中遺跡公園で繰り広げられている



木材の調達には里山の整備に取り組んでいる「NPO法人ひょうご森の倶楽部」、茅の調達は東播磨地域でため池の環境保全と有効活用を進める「いなみ野ため池ミュージアム運営協議会」、作業を担う人員は「考古博物館」とその活動をサポートするボランティアグループである「ひょうご考古楽倶楽部」、そして、建築と環境保全の基礎を学ぶと同時に地域活動に取り組む「国立明石工業高等専門学校」。この五つのグループの「ネットワーク」により、材料の調達から建築作業、活用までを一貫して参加者が担う取り組みが可能となりました。

中でも国立明石工業高等専門学校からは、完成まで1年あるいはそれ以上を要する長期の作業に

もかわらず、毎年20〜30人もの学生の参加があります。先輩から後輩へとノウハウを引き継ぎながら、このプロジェクトの主力メンバーとして活躍しています。

◆◆◆ 第1期整備から第2期整備へ

平成20年1月にスタートしたプロジェクトは、冬場に木材と茅の調達を行い、4月から建築が開始されました。休日を利用した原則、月2回の活動により、平成21年3月によりやく1棟目が完成、盛大に完成式が行われました。

その後、大中遺跡調査委員会の意見をもとに、弥生集落再現ゾーンと位置付けた区域に弥生時代後期の集落景観を

復元することを目的に5棟の建築が計画されました。その第1期整備では、2本柱長方形、5本柱円形、4本柱方形という3棟の復元を目指し、5年余りの歳月をかけ、今年の夏にようやく3棟目が完成する見込みとなりました。

開始から昨年度末までの6年間、計147日に及ぶ

活動に延べ2596人が参加するという息の長い取り組みでした。7年目になる平成26年度も第1期整備の完了と、第2期整備として、平成29年度末までに竪穴住居2棟の完成を目指し、21人でスタートを切りました。

◆◆◆ にぎわう弥生ムラを創造へ

復元された住居の中には開園時間中は自由に出入りできるので、家族や学校団体など公園を訪れる多くの方々が、様々な住居に入り比べて楽しんでおられるのをよく目にします。また、昨年度からは住居内の殺菌・殺虫を目的とした松葉による燻（いぶ）しを定期的に行う際に、見学や体験を促し、好評を博しています。

また、地元の播磨町との連携事業として開催される「健康福祉フェア」や「大中遺跡まつり」は、当館の事業との相乗効果により、毎年多数の参加者で賑わいます。このほか地元団体による音楽イベントや企業が開催するウォークイベントなど、多彩な事業が大中遺跡公園で繰り広げられ、史跡が地域住民にとって身近なものとなっています。こうした取り組みにより大中遺跡公園の利用者は年間25万人前後にも上るようになりました。

今後は、竪穴住居復元プロジェクトをとおして培った「ネットワーク」を大切に育みながら、この活動を継続し、大中遺跡と竪穴住居を歴史学習や古代体験活動の場として活用する新たな方法を模索すること、そして、さらに賑わいのある弥生ムラの創造に向けて、取り組みを進めていきたいと考えています。

弥生の村・妻木晩田遺跡を活かす —市民参加で多彩な活動、魅力を体感—



鳥取県立むきばんだ史跡公園係長

・ 濱田 竜彦

甦る弥生の国邑

国史跡の妻木晩田（むきばんだ）遺跡は、鳥取県米子市と西伯郡大山町に所在する弥生時代後期から古墳時代前期（1～3世紀）の集落跡です。中国地方の最高峰・大山北麓の丘陵上にあり、平成7～9年にかけて行われた発掘調査で全国屈指の大規模な弥生集落として注目を集めました。

村がもつとも栄えていたのは2世紀頃です。中国の歴史書『三国志』の一節、通称「魏志倭人伝」に描かれた倭国の時代です。雄大な日本海を一望する遺跡は、「魏志倭人伝」の冒頭に記された「山島によりて国邑（こくゆう）をなす」という一文を彷彿とさせます。

妻木晩田遺跡発見の契機は、ゴルフ場の開発を原因とする発掘調査でした。ところが、一度に約17軒もの範囲が発掘された結果、約400棟の竪穴住居跡や約500棟の掘立柱建物跡、村の指導者たちが眠る墳丘墓群などが次々と確認されました。

た。相次ぐ重要な発見により、開発の是非が議論され、「国家形成への歩みを始める古墳時代の前史となる弥生後期の社会を考える上で（中略）、全国的にきわめて重要な事例」として（注1）、全面保存された遺跡は、平成11年12月に国の史跡に指定されました（現在の指定面積は約152軒）。現在は、調査で発見された各種遺構を保護するとともに、竪穴住居や高床倉庫を復元しながら、2世紀の集落景観を整備しています。

弥生のフィールドミュージアム

史跡整備は平成12年にスタートし、その後、平成15年度に洞ノ原地区で墳丘墓群や集落景観の復元、平成22年度に展示室や体験学習室を備えたガイダンス施設の建設、平成24年に妻木山地区や妻木新山地区で集落景観の復元や遺構展示館、発掘体感広場の整備が完了し、本格的に史跡を活用する環境が整いました。

現在は「鳥取県立むきばんだ史跡公園」として



ボランティアガイドの案内で竪穴住居を見学する観光客ら

一般に公開、活用されています。史跡公園のコンセプトは「甦る弥生の国邑」、遺跡の魅力を身近に感じてもらえる「弥生のフィールドミュージアム」です。

普段、解説を希望される見学者には、「妻木晩田遺跡ボランティアガイドの会」が遺跡を案内しています。学校などの教育関係機関に対しては、文化財の専門職員が、それぞれの目的に応じて、遺跡や展示の解説、各種古代体験の指導などを担当しています。最近では、社会科で弥生時代を学んだ小学校6年生の遺跡見学、古代体験の申し込みが増加しています。

また、休日などには、事前申し込みを必要としない、火おこしや勾玉（まがたま）づくりなどの古代体験（通年）や、発掘体感広場を活用した発掘体験（6～11月）をお楽しみいただいています。なお、こうした古代体験には、古代体験ボランティアの協力を得ています。

年間を通じて、様々なイベントや講座を企画、運営していますが（注2）、ここでは、地域と連携した取り組みをいくつか紹介します。



遺跡を見学する小学生



ジュニアファンクラブによるアワやキビの収穫体験



古代体験（弥生土器づくり）の様子。焼き上がった土器を取り出す子どもたち

○むきばんだジュニアファンクラブ

会員制の体験講座です。対象は小学4年生から中学生で、年9回の活動を通じて、妻木晩田遺跡の四季を感じながら弥生の暮らしを体験するものです。弥生時代の生活文化を学びながら、アワやキビなどの穀物を栽培したり、カイコを育て、採取した絹を紡いだり、自作の石包丁で作物を収穫したりします。また、島根大学教育学部付属教育支援センターとの連携により、教員を目指す学生もサポーターとして活動に参加しています。

○なりきり弥生人生活

地元の市町教育委員会や観光部局などと組織する「妻木晩田遺跡活用実行委員会」が8月に主催する1泊2日の宿泊体験イベントです。一度に6組の家族を受け入れ、竪穴住居に宿泊まりしてもらいます。もちろん、ご飯は自炊です。薪割り、火おこし、そして、弥生土器（復元品）を使って

お米を炊きます。家族で力を合わせて、弥生時代の生活を体感する人気企画です。

○GWはむきばんだ日和！

5月の大型連休企画です。連日、日替わりのイベントや古代体験を準備し、来園者にお楽しみいただきます。日頃、むきばんだ史跡公園で活動しているサークルなどが実施する自然観察会やモノづくりの講座なども開かれます。

○宵まつり

8月に開催している夜のイベントです。クライマックスは、夕暮れ時に、海岸線を望む墳丘墓群で執り行う、弥生の巫女（みこ）たちによる神おろしの演出や、来園者によるたいまつ行列です。地元の高校生が演じる民俗芸能などもたいへん好評です。

○むきばんだまつり

地元の活動団体やジュニアファンクラブなどの協力を得て、9月の秋分の日に開催する史跡公園最大のイベントです。秋の収穫祭をイメージしたセレモニーで開会し、古代体験、古代食コーナーをお楽しみいただきます。昨年は約3000人が訪れました。

◆◆◆ 遺跡関連情報の発信を充実 保存・活用の取り組みも強化

史跡妻木晩田遺跡は、大規模な弥生集落の典型として、文化財の関係者や歴史ファンに広く知られています。しかし、貴重な遺跡を守り伝えていくためには、その存在や価値をより多くの人々と共有する必要があります。

そのためには、まず、むきばんだ史跡公園に來園いただき、妻木晩田遺跡に、かつて大きな弥生の村があったことを知ってもらわなければなりません。さまざまな取り組みは、いろいろな価値観をもつ方々への情報発信です。「何か楽しそうなことをしている」「楽しそうなことができる」「場所として認識してもらおうことが妻木晩田遺跡にとって今一番大事であり、そのためには、地元の方々との連携を深めながら、遺跡を守り伝えていくための取り組み、仕組みづくりを充実していきたいと考えています。

（注1）文化庁 国指定史跡データベース

<http://kushitei.bunka.go.jp/bsys/maindetail.asp>

（注2）鳥取県立むきばんだ史跡公園ホームページ
<http://www.pref.tottori.lg.jp/mukibandai/>

市民の力で遺跡を保存、憩いの史跡公園に —弥生時代の特異な環壕集落・田和山遺跡—

松江市歴史まちづくり部まちづくり文化財課
埋蔵文化財調査室主任

・川西 学

歴史のまち松江

松江市は島根県の北東部に位置し、東は中海、西は宍道湖に挟まれ、この二つを結ぶ大橋川を中心として市街地が広がる。現在の市街地は江戸時代に松江城の城下町として整備されたことに始まるが、かつては市街地南郊に当たる大庭・山地地区を中心とし、出雲国府や国分寺をはじめ、主に



発掘当時の田和山遺跡

弥生時代から奈良時代の遺跡が数多く存在することが知られている。

このことから、松江市は古くから島根県東部（出雲国）の中心地として栄えた地であると言える。今回紹介する田和山遺跡は市街地南西

部の乃白町にある。標高45mの丘陵上に位置し、頂上からは宍道湖が一望でき、天気の良い日には遠く鳥取県にある大山の姿を見ることができるといわれる。

三重の壕で囲まれた特異な遺跡

田和山地区は平成7年ごろから、老朽化した市立病院の移転候補地として開発計画が持ち上がった。このため平成9年には発掘調査が開始され、山頂に弥生時代の掘立柱建物とそれを取り囲む三重の環壕が発見された。

通常、集落を壕で囲む集落遺跡を環壕集落と呼ぶ。しかし、田和山遺跡では集落は環壕の外にあり、環壕に囲まれた狭い平坦な山頂部には5本または9本柱の掘立柱建物があるだけで、人の生活した痕跡が見られなかった。このため、田和山遺跡はいくさが起こった際の城塞的な遺跡とも、周辺に暮らす人々の精神的なよりどころとなる祭祀的な遺跡とも考えられ、全国的に特異な遺跡として注目を浴びることとなった。

市民の力で遺跡保存

当初、松江市は発掘調査の成果を記録するにとどめ、遺跡の保存は行わない方針だった。これに対し、遺跡を現地で保存しようとする考古学関係者ばかりでなく、地元住民からも声が上がリ、一時は松江地方裁判所に訴訟が起こされるほど保存運動が激化した。

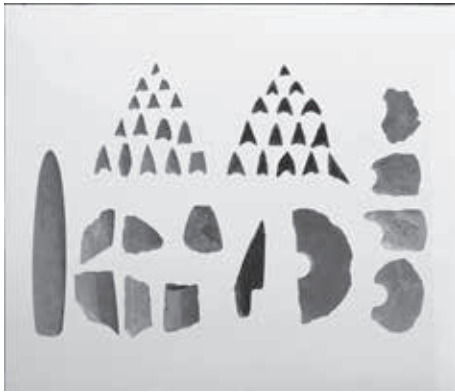
この保存運動の高まりに配慮し、松江市は病院と遺跡が共存できるよう設計を見直し、遺跡の大半を保存することを決定した。これを受け、平成13年8月には全国でも類例のない遺跡であることから国指定の史跡となった。

今回のように、一度は破壊が決まっていた遺跡が市民の熱意によって一転して保存されることになったことは、非常に珍しい事例と言える。

史跡公園を整備 遺跡保護と「市民の憩いの場」めざす

遺跡の整備は、検討委員会を立ち上げるとともに、市民参加のワークショップも開催しながら進められた。その基本テーマは「宍道湖の風が吹き抜け、心洗われる弥生の丘」。遺跡の保存のみならず市民の癒しと憩いの場とし、周辺の遺跡や観光地と連携できることを目標として史跡公園を整備した。

史跡公園は大きく住居部・環壕部・山頂部に分けられる。まず、住居部については、遺跡で見つかった住居址のうち特徴的な3棟について復元を行い、弥生時代の雰囲気が醸し出せるように整備



田和山遺跡で出土した剣や矢じりなどの武器形石器



田和山サポートクラブによる遺跡ガイドの様子



火起こし体験学習。復元した竪穴式住居で行われている

史跡公園周辺は水田の広がるのどかな風景が見られたが、近年徐々に商業地へと姿を変えつつあり、こうしたまちづくりの動きと史跡公園がどのように連携できるかも考えなければならない。

このほかにもいくつか課題があるものの、今後も市民団体と行政が協働で課題をひとつひとつ乗り越えていき、遺跡としての側面だけでなく、市民に安らぎを提供する場としても田和山史跡公園を後世に伝えるべく努力したいと思う。

市民団体と手を携え、 史跡公園を運営・活用

史跡公園は市の直営であるが、日常の管理については市民団体である「田和山サポートクラブ」

した。環壕部については、全体を盛土により保護し、崩れた部分は復元して当時の三重の環壕の姿を再現した。一方で、掘立柱建物跡が見つかった山頂部については、あえて建物を復元せず、柱穴の位置を示すにとどめた。これは、神殿とも見張り櫓（やぐら）とも言われる山頂の建物跡について、来場者が自由に想像をめぐらすことができるようにするためである。

こうして4年の歳月をかけて平成17年8月に「史跡田和山遺跡公園」（約5・1ヘクタール）がオープンした。

と「里山を育てる会」に負うところが大きいの。田和山サポートクラブは、遺跡保存に尽力した市民団体が母体となって平成15年に設立された。普段は遺跡のガイドや公園の巡視をお願いしているが、特筆すべき点はイベントの企画力にある。地元の乃木小学校の総合学習授業に協力するほか、古代米の田植えや火起こし体験などの体験学習的なイベントを自主的に企画運営している。また、ボランティアガイドの育成事業や田和山遺跡と関連した講演会の開催なども継続的に行っている。

里山を育てる会は、田和山史跡公園内にある自然学習の森と呼ばれる自然の木々が青々と茂った森が残るゾーンの管理を担当し、毎月定期的に作業日を設け、除草作業や枝打ちなど、文字通り里山の自然を育てる活動を展開。また、「植樹祭」

おわりに

や「キンランを楽しむ会」など、自由な発想で様々なイベントも開催している。

これらの団体と松江市は月に1回、連絡会を開催し、史跡公園の維持管理やイベントについて情報を交換するなど連携を継続している。

こうした取り組みにより、田和山史跡公園には遠方からも観光客が訪れるほか、地元住民の憩いの場として定着し、天気の良い週末には来場者は100人を超え、平日でも地元住民のウォーキングコースとして親しまれる公園となった。

今年、田和山史跡公園がオープンしてから9年が経過した。この間、市民団体のメンバーも高齢化しており、新たな構成員の勧誘と育成が大きな課題となっている。また、かつて

赤い町並み・吹屋に新たな活気生み出す ―多様なイベント開催、地元を元気に!―

高梁市教育委員会社会教育課文化係長 ● 伊達 昌弘

銅山とベンガラで繁栄した吹屋

高梁市は岡山県の中西部に位置し、このうち吹屋地区は、高梁市の北西部にあり、その大半は標高550メートルの高原と山林で占められています。

吹屋地域一帯は、中世末期以降、銅の産出で知られ、江戸時代に入ると吉岡銅山と呼ばれるよう

になります。明治

以降は近代的な経営が行われ、明治末から大正初め頃にかけてもっとも多くの銅が産出されました。

また、江戸時代中期からは赤色顔料のベンガラ生産も新たな産業としておこり、銅山と



風に舞うベンガラの染め物

ともに地域独自の産業として隆盛を極めました。ベンガラは、経年変化に強く、古くから漆器、衣料の下染め、家屋の塗料などに使われ、吹屋は昭和40年頃まで国内で有数のベンガラ特産地として大いに繁栄しました。

独特の赤い町並み

この二つの産業を背景として、銅山の近くに坑夫集落ができ、江戸中期から後期にかけて街道沿いに問屋や小売商などが軒を連ね、約1・5キロの県道に沿って町並みが形成されています。吹屋の町並みは、個々の屋敷が豪華さを競うのではなく、旦那衆が相談をして石州(島根県西部の石見地方)から大工を招いて、町全体が統一したコンセプトに基づいてつくられています。

景観を最も特徴づけている屋根は、赤褐色の黒っぽい瓦から黄色っぽい瓦のものまで様々な色合いの石州瓦で葺(ふ)かれ、外壁は白漆喰(しっくい)、ねずみ漆喰、海鼠(なまこ)壁、焼板な

どが見られ、土壁には地元の赤土が使われているために薄い赤色に色づいています。格子はベンガラ塗りとするなど、意匠の優れた町家が多く、栄えた往時を偲ばせています。

このように吹屋独特の歴史ある町並みは、ベンガラで栄えた面影を今も色濃く残しています。

地域の町並み保存

町並み保存地区内では、昭和52年5月に重要伝統的建造物群保存地区(重伝建地区)に選定されたのを契機に、昭和53年に吹屋町並保存会が発足しました。発足以来、保存会は家屋や工作物の保存のため、家屋の調査、情報収集や年度ごとの保存修理事業にかかる家屋の選定の取りまとめを行い、計画的に保存修理を実施しています。

保存会では、町並みの清掃活動や防災訓練等を継続的に行うとともに、屋号などその家屋の移り変わりがよくわかるよう家屋に説明板を設置して紹介するなど、様々な活動に取り組んでいます。また、以前から取り組んでいた地域の道路整備では保存地区内道路の舗装に当たり、町並みに配慮した材質や色調を使い、かつての姿を取り戻しつつあります。

吹屋ベンガラ染め

町並みの入り口にある吹屋案内所では「来る人を温かく迎え案内しよう」と、お茶の接待や昔の吹屋や町並みのことを紹介しています。

また、毎週月曜日の晴天の日には、「吹屋ベン



「吹屋ベンガラ灯り」の灯ろうのほのかな明かりの中、三味線・尺八の音にあわせて吹屋小唄踊りがしっかりと踊られる



「元気酒場」の様子。若者が企画したこの元気酒場は新たな賑わいを吹屋にもたらしている

ガラ染めの会」が、ベンガラを使った染め物をしており、濃いベンガラ色に染め上げたのれん、淡く染められたハンカチやストールが風にひらひらと舞い乾燥されている姿は実に美しい光景です。吹屋のベンガラが宝永4年（1707年）に発見されて300年経った現在、ベンガラ製造という形ではなく、時を越えて、「ベンガラ染め」という姿でよみがえっています。

◆◆◆「吹屋ベンガラ灯り」、「吹屋小唄」…町並み活性化で新機軸続々

吹屋地区も全国的な動きと同様に急速に高齢化が進み、空き家の増加や町並みへの来訪客の伸び悩みなど沈滞ムードが開始していますが、そうしたムードを払しょくするためにいくつかのイベントが生まれています。

各家が押し入れに眠っていたお雛様を展示する「ひなまつり」、町並みへの来訪者に「ありがと」の気持ちを込めた「感謝祭」、地元小学生がデザインしたキャラクター「べんがらくん」を活かした取り組みなどが行われています。

また、山地や丘陵など自然地形を活かした上り坂コースでタイムを競う全国規模の自転車競技「ヒルクライムチャレンジシリーズ吹屋ふるさと村大会」の開催にあたり、ゴールの吹屋では、地域をあげておもてなしを行っています。さらに平成22年からは陶製灯ろうの教室を開催するとともに、市内の高校生が製作したエコロウソクを使い、出来上がった灯ろうを町並みに並べる「吹屋ベンガラ灯り」などが行われ、開催中は大勢の人で賑わいます。

特に「吹屋燈籠 ほのあかり ベンガラ色の

町のなみ」という歌い出しで、石州瓦の屋根や国内最古の現役木造校舎であった吹屋小学校といった吹屋の魅力を盛り込んだ、民謡「吹屋小唄」が地元出身の方の作詞作曲によって誕生しました。そして地域の方々がこの吹屋小唄に振り付けがつかないものかと考え、振付師に振り付けを依頼し、地元吹屋などの女性およそ20人が練習を重ね、平成24年9月に「吹屋ベンガラ灯り」に合わせ、吹屋の町並みで初めて披露しました。

吹屋の新しい魅力のさらなる創出に向け、地元青年団を中心に「吹屋小唄」を広めるため、昨年は男踊りも創作し、踊りたいという希望者を地元以外にも募り練習を重ね、吹屋の町並みと幻想的な灯ろうの明かりの中、披露されました。

◆◆◆若者が中心となり、「元気酒場」も

また、地域おこし協力隊らの若者が中心となり、酒蔵を活用した「元気酒場」が今年度、新たに始まりました。すでに3回開催していますが、各回テーマを設け、地域内外の方々が出店し、地元の方々などをおもてなししています。また、この酒場では「吹屋小唄踊り」「松山踊り」などが披露されるとともに、吹屋と近隣地域そして観光客との交流など新たな賑わいが生まれています。

このように高齢化が進み、やや沈滞ムードも漂う吹屋ですが、若者たちが中心となり、活気あふれる吹屋を目指し、日々頑張っています。そしてこうした活動が伝統ある町並みの保存と地域の活性化につながることを強く期待しています。

貴重な酒蔵を保存し、交流拠点に活用 ―ひな祭りやコンサート、イベントで地域活性化―

日高酒蔵会会長 ● 松岡 弘二郎

日高酒蔵会発足のいきさつ

私たち日高酒蔵会が活動している所は、高知県のほぼ中央部に位置する「日高村」という人口約5400人弱の村です。県都高知市より西へ約16^{キロ}ですが、豊かな自然や、水質日本一に輝いた^仁淀ブルーと称される「仁淀川」があり、特産品としては、高糖度トマトのブランドである「シユガートマト」の生産が盛んに行われています。

また、小村神社には、国宝の「金銅莊瓊頭大刀」や、国の重要文化財である「木造菩薩面（2面）」などがある歴史ある村です。

私たちの活動拠点である旧松岡酒造は、1890（明治23）年に高知県高岡郡日高村本郷で創業を開始しました。1975（昭和50）年頃には、須崎市と日高村の2カ所に酒蔵を構え、年間180^{キロ}を生産する造り酒屋でしたが、約25年前に閉鎖しました。

2003（平成15）年に高知工業高校の学生が

「登録文化財基礎調査」をおこない、2004（平成16）年に国の登録有形文化財となりました。

ところが、2009（平成21）年1月に所有者である松岡弘城氏が酒蔵の老朽化と雨漏りが激しいことを理由に、「一部を取り壊したい」と日高村に申し入れをしました。

これを知った地元の有志が、貴重な日高村のお宝を何とか残したいと運動を起こしました。これが、のちに日高酒蔵会の運動となっていきます。

酒蔵の保全活用の動き

2009年1月、文化財を活かした地域づくり活動に「日高村子どもの未来応援団（子ども支援ボランティア）」が取り組むことになり、組織的な酒蔵の活用の動きが始まりました。

その後、有志で「旧松岡酒造酒蔵保全活用委員会」を立ち上げ、日高村議会に「旧松岡酒造保全活用に関するお願い」の請願書を提出、日高村に酒蔵保全のための改修予算を組んでいただき、県

からも補助金を頂きました。

酒蔵を「ふれあいホール」に ひな祭りや婚活パーティーを開催

改修予算化に伴い会の名称を「日高酒蔵会」として組織（16名）することになり、酒蔵を「日高酒蔵ふれあいホール」としました。

保全するだけでなく、この建物を有効に活用するためイベントも企画しました。日高村のお宝を広く村民の皆様を知っていただくために、2009年2月28日（土）、3月1日（日）には、初めてのイベントとして、「ひなまつり」を開催しました。

長い間使用されていなかったため酒蔵の中は整



夏祭りの様子（平成25年7月）



酒蔵を会場にコンサート（平成 25 年 8 月）

理されておらず、ホールの片づけから始めました。地元の仲間や「日高村子どもの未来応援団」のボランティアの皆さんに協力していただきホールにステージを作り、歌や踊りなどの発表者を募集しました。そして、母屋にひな飾りを展示するため、地元を中心におひなさまを貸していただける方を探しました。何もないところからのスタートでした。

本宅の会場には、地元に伝わる貴重なひな飾りなどがたくさん集まりました。

雛人形の前では、放課後子ども教室の茶道クラブの方が、抹茶のサービスをしてくださいました。



「ひなまつり」の様子。ダンスを披露する子供たち（平成 26 年 3 月）

訪れたお客さんには、たいへん好評でした。こうして酒蔵での初めてのひな祭りイベントをみんなで作りました。2日間でお客さんは約800人に上りました。

募金活動も行い、集まった募金を活用させていただき、えんとつ広場のコンクリート舗装を酒蔵会など十数名が参加して行いました。足元の不安が解消され、今後の広場の活用が楽しみとなりました。

また、2009年10月10日（土）には婚活パーティーを開催。日高村と周辺の市町村から男女44名が参加し、地元の食材を使ったピザ作り体験な

ど楽しみました。この出会いで、5組のカップルが誕生し、少しは地域の活性化につながったのではないかと思います。

現在も、酒蔵ホールは地域の皆様と村外の方々の交流の場として夏祭りやひな祭り、コンサートの開催や映画上映、地域住民の方々の発表の場として活用されています。

酒蔵会の運営、ボランティアで

酒蔵会は現在、11名のスタッフで運営しており、月に1回程度、委員会を開き、イベントの開催計画や反省会、意見交換などを行っています。

スタッフはすべてボランティアで活動しています。個々に仕事等を持っていますので、イベント時にはスタッフが揃わない時もあり、準備やイベント開催時には苦労していますが、スタッフ一同酒蔵が好きで楽しく活動しています。

地域の交流拠点めざす

酒蔵会が活動を始めて6年目に入り、徐々にではありますが、酒蔵ホールを訪れてくださる方々も増えてきています。しかしながら、まだまだ試行錯誤の状況です。

スタッフも11名での活動ですので、会員増に向けた取り組みや組織強化を図りながら、10年、20年と続いていくものにしていくつもりです。これからも地域の活動拠点、観光文化発信拠点、様々な方々の交流の場となっていけるよう活動していきたいと考えています。

「大友宗麟プロモーション」で大分を活性化 — 遺跡も整備し、観光振興図る —



大分市商工農政部観光課主任
(大友宗麟プロモーション担当)

・ 加藤 康寛

◆ ◆ ◆ 南蛮文化発祥都市・大分

皆さんは戦国大名大友宗麟をご存じでしょうか。今から約450年前の戦国時代、当時豊後府内と呼ばれた大分市を本拠に大友氏第21代当主として北部九州を治めました。宗麟21歳の時、山口に滞在していたフランシスコ・ザビエルを府内

と西洋文化が渾然一体となり、全国に先駆けて南蛮文化が花開きます。大分市では昨年、こうした歴史を踏まえ市誕生100年を記念して「南蛮文化国際フォーラム」を開催し、「南蛮文化発祥都市宣言」を行いました。

実は、大分で生まれ育った私も、現在の部署で担当になるまでは、「大友宗麟」の名前は知っていたものの、その詳しい内容までは知らなかったというのが正直なところです。おそらく多くの市民が私と一緒にではないかと思っています。郷土の偉人を市民の皆さんにまずは知っていただくことが大きな、そして重要な仕事であると認識するところから今の仕事がスタートしました。

◆ ◆ ◆ 大友宗麟プロモーション始動

本格的な地方分権時代の到来を迎え、都市の個性がいつそう重要となり、自らの住む地域の歴史や文化を活かした特色あるまちづくりが求められています。そのためには、地域に脈々と受け継が

れてきた歴史や文化に光を当て、市民がまちの誇りとしてその価値を共有していくことが大事です。

現在の分市は人口47万、風光明媚、豊かな食文化に恵まれた東九州の中核都市であり、大分の県都としての役割を担っています。450年前、宗麟の「進取」の精神により広く世界に門戸を開き、当時の日本の中でも有数の国際貿易都市として繁栄していました。このような様々な史実を改めて検証し、当時の豊後府内に暮らした先人たちの活気に満ちた生活の息吹を伝える有形・無形の歴史遺産を市民共有の誇り、本市の「顔」として、全国に情報発信していくために昨年度から大友宗麟プロモーションに取り組んでいます。

◆ ◆ ◆ 全国でも最大級の庭園跡発見 大友氏遺跡が国の史跡に

ソフト事業と情報発信の柱となるのが大友宗麟プロモーションであるなら、ハード面の中核となるのが、大友氏の居宅である大友館跡を中心とする大友氏遺跡です。

大分駅からほど近い大分市顕徳町にある大友館の庭園跡が平成10年に400年の時を経て、現代に姿を現しました。全国でも最大級の規模をもつ庭園跡の発見は驚きをもって報道され、一辺200m四方という巨大な大友館の存在を裏付けました。平成13年にはその一部が国の史跡に指定され、次世代へと大切に伝えていくための環境が整えられつつあります。

府内のまちは、この館の主である大友宗麟（義鎮）の時に南蛮貿易による経済力を背景に最盛期



国史跡大友氏館庭園跡。南北66m、東西28mの規模の池をもつ。戦国大名の館の庭園跡としては全国最大級



市誕生100年事業の「フェスティバス・ナタリス in 豊後」の様子。市民ボランティア組織が中心となり、南蛮行列の再現や音楽、演劇など往時の府内を偲ばせる各種催しを大友氏遺跡にて実施

を迎え、大友館を中心に南北2・1^{キロ}、東西0・7^{キロ}におよぶ国際色豊かなまちに発展したといわれています。大友館の西側には府内教会（ダイウス堂）や、日本初の西洋式病院である府内病院、日本最初の高等教育機関（大学）である府内コレジオなどが立ち並んでいました。街頭には西洋音楽が流れ、西洋、東洋の様々な国の人々が行き交う異国情緒に溢れたまちであったと考えられています。

◆◆◆ 「大友宗麟」を旗印にまちづくり 市民と協働し、様々な事業を展開

大友宗麟プロモーション事業では、市民から事業提案をいただき、市民の手による様々な事業を展開しています。たとえば、当時のクリスマスを再現した「戦国クリスマス・フェスティバス・ナタリス in 豊後」や「宗麟公まつり」を開催するなど、往時の賑わいと人々の生活の様子を体感で



大友氏遺跡体験学習館。平成20年に大友氏遺跡の一角に設置。歴史講座、体験学習等、大友氏遺跡に関する様々な学習メニューを用意している

きるような各種催しが毎年行われています。こうした活動と相まって、多くの市民主導によるボランティア組織が立ち上がっています。「おおいた応援隊大友歴史保存会」や「大友遊学会」によるガイドや学習会の実施、NPO法人大友氏顕彰会によるフォーラムの開催やNHK大河ドラマ誘致推進協議会の結成など、市民団体による主体的な活動も年々活発になっています。

また、行政側の活動では、子供たちに郷土の歴史を知ってもらうことが大事であることから、昨年度から市内の小学校6年生を対象に大友宗麟の副読本を作成し、授業のカリキュラムの中に組み込み、子供たちが学習する機会を設けています。さらに大友氏遺跡体験学習館では、民間ボランティア組織と密に連携しながら、積極的な情報発信を行っています。

情報発信という点では、大分市と同じく当時のキリシタン・南蛮文化遺産をもつ県内5市町（国

東市・日出町・竹田市・臼杵市・津久見市）とでキリシタン・南蛮文化交流協定を締結し、本年2月には協議会を立ち上げました。この5月には本市にて「キリシタン・南蛮文化交流首長サミット」を開催し、関係する県内市町が連携して情報発信を行うことにより、それぞれの地域の活性化や観光振興の面で大きな効果が期待できることを改めて確認することができました。

大友氏遺跡については、昨年度、『史跡大友氏遺跡保存管理計画書』を作成し、史跡の保護・保存のための指針やこれからの整備に関する整備基本構想を定め、史跡公園整備への端緒を開いたところです。

◆◆◆ 新たなまちの魅力を創造へ

現在、市中心部は今後の100年を見据えた大規模な再開発が行われており、大きく変貌しつつあります。その中心にあるJR大分駅の北口には大友宗麟の銅像が立っていました。現在は、整備に伴い他の場所へ移設されていますが、来春の整備の完了時には新たに製作されるザビエル像とともに再びその雄姿が戻ってきます。

歴史が物語るいにしへの記憶は、地域発展の大きな可能性とポテンシャルの証であり、都市の自信そのものといえます。市民と手を携え行う大友宗麟プロモーションは、市中心部に近接し、広大な面積を占める史跡大友氏遺跡の今後の整備と活用とともに、本市の新たなまちの魅力となっていくでしょう。これからの新しい大分市の姿にご期待ください。

「山ヶ野金山」を舞台にウォーキング大会

—豊富な文化財活用し、地域おこし—

山ヶ野金山文化財保護活用実行委員会専門委員

・有川 和秀

ふるさと横川町山ヶ野

金山の歴史を歩いてきたふるさと横川町山ヶ野。手つかずのままに残る金山史跡や文化財。これらを見直し、発信しよう、地域の元氣も盛り上げようと動き始めたのは14年前である。

平成17年、鹿児島県横川町は市町合併を経

て霧島市とな

る。市人口が

12万7000

人。うち横川町

は4565人の

小規模な山間農

業地帯である。

空港が近く、大

小の工場20数社

が進出している

が、過疎・高齢

化は確実に進ん

金鉱石が豊富に採掘された晒坑



でいる。金山があった山ヶ野地区は、現在世帯数70世帯、人口126人、高齢化率64%の地である。

佐渡金山に次ぐ、かつての山ヶ野金山。今も金

山町の歴史を残す道や家並み、石垣等が見られ、清流がせせらぎ、穏やかに時が流れる。地区はこの歴史を誇りとしているが、詳しく歴史を語る人も少なくなっていた。地域環境の保全維持も難しくなりつつあった。

豊富な金山史跡や文化財

山ヶ野金山は江戸時代の寛永17年(1640年)に開山した。金山の周囲は12^キほど。産金量は80^ト。金による利潤は薩摩藩の財政を支え、借金返済や新田開発に充てられた。当初は2万人の労働者を集め、操業を始めた。働く人の衣食や娯楽を賄う金山町は大いに賑わった。

明治期には欧米の先端技術が導入された。金山道の開鑿(かいさく)、早期の電力化。地域子弟のための「鉱業館夜学校」の創立。金山の人や物資

で賑わった横川駅。鉱区内には4小学校があった。大正期には大工場化されたが、珪肺などの負の側面があったほか、第二次世界大戦時の一時閉鎖などを経て山は衰微していき、昭和28年に操業を停止した。

多くの人や物が行き来し、他地域と違った300年余の歴史を歩み、今なお広域にわたり史跡や文化財が残る地域である。多くの史跡と山には坑道跡が点在し、天降川(あもりがわ)源流域の自然の中に独特の景観を見せている。このほか鉱山の道具類、史料や古い写真なども残されている。

文化財保護に向け、実行委員会

我々の先輩方は山ヶ野金山史の書を著し、公民館には金山資料室を設け、案内板も設置した。それを引き継ぎ、もっと大きく郷土の顕彰を進め、地域を盛り立てようと平成13年、地元の青壮年13人で「山ヶ野金山文化財保護活用実行委員会」を結成した。

史跡めぐりのウォーキング大会を開催「おもてなし」の心で、住民がスタッフに

まずは金山を知ってもらおうと、実行委員会が中心となり、「山ヶ野ウォーキング」を開催した。平成26年3月で13回目の大会となった。金山内の史跡24カ所や安良(やすら)神社の神舞(かんなま)を見巡りし、早春の金山の里を1日かけて堪能する13^キのウォーキングである。

参加者は350名ほどとし、地域住民、中高生、町内有志、市職員など約290名がスタッフとし

て対応し、参加者には2500円を負担していた
だいている。

第1回大会のことだった。

スタッフを務めた、かっぱう着姿のおばあちゃん
が呟いた。

「お客さん方が里に下りてこられた時、泣き
いぐらうれしかった。(以前に) 山ヶ野にこんな
にたくさんの方が集まったのはいつだったろう」

この接遇の気持ちは今も変わらない。

また、「こんな金山があったとは」と多くの参
加者が驚かれる。

ウォーキングコースのポイントでは中学生が説
明役、大人はサポート役となる。フレッシュな案
内に大きな拍手を頂く。事前に歴史学習や資料作
成に取り組んでいる。

町内の小学6年生は全員ウォークに招待し、一



安良神社の神舞



地域女性の「美人茶屋」。ウォーキン
グ参加者をお茶でおもてなし

般の参加者とともに歩く。昼食やお茶のおもてな
し、砂金採取の実演、歴史クイズ、金鉱石のお土
産、地元の米やそば粉の販売など住民のほとんど
が関わる。

現在はほかの町に住んでいる出身者も帰省し、
案内や接待に当たる。ウォーキング大会が終わる
と、食事会や反省会を持ち、旧交を温め集合写真
に納まる。新しい恒例のお祭りになっている。

草取りなど、コースの整備作業は多くの人手が
必要だが、地区は高齢化が進み人手がすっかり少
なくなった。7年前からはウォーク参加者にも協
力を呼びかけ、今では30名余りが事前に作業を手
伝ってくれている。明るい見通しが見えてきた。

歴史学習や史跡確認調査も

一方、金山史講演会、観光
客などへの説明や案内に備え
た研修会、史跡調査法の研修
などにも取り組んでいる。

また行政と協力し、史跡地
図・説明板・道標識を設置する
とともに、パンフレットや歴
史史跡の冊子も作成し、ウォー
キングや案内、研修等で活用
している。

古くからの家庭行事や衣食
文化を記録した「山ヶ野の正月
とお盆」という絵巻物も作成、
収集した民具とともにウォー
キングコースの随所に展示し

ている。ウォーキング大会で神舞を上演すること
で、こうした文化の保存・継承にも役立っている。

成果と今後の課題

こうした「山ヶ野金山文化財保護活用実行委員
会」や地元住民の活動によって大きな成果も生ま
れつつある。

ウォーキング大会の参加者が県内外に広がり、
山ヶ野金山を広く知ってもらおうようになったほ
か、この催しを通して地域が活性化し、まとまり
が出てきた。また大会を機に、帰省する人もあり、
地元住民と旧交を温める場になっている。

「六月灯」や「やけにわ講」といった地域行事
も見直され、神舞の保存も継続されている。

中学生のガイドは有意義な郷土教育となり、次
世代に文化財を継承する望みも持てる。小学生の
参加は何より行事を明るくしている。

今後はさらに①文化財の保護活用にあたり行政
との協働を推進し、隣町との連携を進める②実行
委員会の組織活性化や、ウォーキング参加者の受
け入れ拡大を図る―ことなども検討している。

このほか、ボランティアも参加した史跡・石垣
調査、「金山史跡を学ぶ」学術的集い、指定文化
財への働きかけ、自然環境の活用も企画したいと
考えている。

過疎化・高齢化は依然として厳しく、課題も山
積みされている。今後は広く市全域に働きかけ、
山ヶ野金山の市や県の史跡指定をめざし、引き続
き「金山地域の歴史と人が息吹く地域おこし」を
続けたい。

「富岡製糸場と絹産業遺産群」が世界遺産に

～日本で18件目、近代の産業遺産では初～

群馬県企画部世界遺産推進課地域連携係長

● 井上 昌美

世界遺産登録に沸く地元・群馬

本年6月にカタールの首都ドーハで開かれた第38回ユネスコ世界遺産委員会で、「富岡製糸場と絹産業遺産群」の世界遺産登録が決定されました。日本で18件目の世界遺産であり、近代の産業遺産としては国内で初めての登録です。登録の審議においては、多くの委員国の代表から賞賛の言葉をいただくことができました。資産のある地元では、登録の決定前から県内外の多くの方々が訪れるようになり、賑わいを見せています。

世界遺産としての価値

「富岡製糸場と絹産業遺産群」の世界遺産としての価値は、高品質な生糸の大量生産を実現した「技術革新」と、日本と世界との間の「技術交流」にあります。

日本は20世紀の初めには世界一の生糸輸出国となり、1930年代には世界の生糸輸出量の80%を日本製が占めるまでになりました。日本が開発

した生糸の大量生産技術は、生産量が限られ一部の特権階級のものであった絹を世界中の人々に広め、その生活や文化をさらに豊かなものに変えました。富岡製糸場と養蚕に関わる資産の田島弥平旧宅、高山社跡、荒船風穴は、そのことを今に伝える証なのです。

四つの構成資産

それでは四つの資産を紹介しましょう。

富岡製糸場は、明治5（1872）年に創られた日本初の本格的製糸工場です。蒸気機関やフランス式繰糸器などの西欧技術が導入され、ここから全国に器械製糸技術が伝えられました。そして昭和62（1987）年に操業を停止するまで、常に製糸技術開発の最先端であり続けたのです。富岡製糸場には和洋技術を混交して建てられた木骨レンガ造の繰糸場や繭倉庫などが残されています。

田島弥平旧宅は、通風を重視した蚕の飼育法「清涼育」を大成した田島弥平が、文久3（1863）



富岡製糸場（富岡市）

年に建てた住居兼蚕室で、初めて屋根に換気用の越屋根が付けられました。瓦屋根に換気設備を取り付けたこの建物は、近代養蚕農家の原型となりました。

高山社跡は、高山長五郎が確立した「清温育」という通風と温度管理を調和させた蚕の飼育法を教える養蚕教育機関高山社の発祥の地です。高山社には日本全国のみならず、中国や朝鮮半島からも生徒が集まり、「清温育」は全国標準の養蚕法となりました。

荒船風穴は、岩の隙間から吹き出す冷風を利用した国内最大規模の蚕種（蚕の卵）の貯蔵施設です。冷蔵技術を活かし、孵化の時期を調節することにより、当時年1回だった養蚕を複数回可能にし、繭の増産に貢献しました。

これらの資産は相互に連携し、技術の交流を

行っていました。特に富岡製糸場が良質な繭を大量に確保するために行った繭の改良運動の際には、3資産が大きな役割を果たしました。

登録に至る取り組み

富岡製糸場を世界遺産に登録しようという取り組みは、平成15（2003）年に始まりました。平成19（2007）年には「富岡製糸場と絹産業遺産群」が世界遺産暫定一覧表に記載され、平成25（2013）年1月に日本政府からユネスコに推薦書が提出されたのです。この間、文化庁・群馬県・関係市町が協力し資産の調査研究を行い、学術委員会で議論を重ねました。世界遺産登録は10年を超える一大プロジェクトとなりました。

この世界遺産登録には県民団体も重要な役割を



田島弥平旧宅（伊勢崎市）



高山社跡（藤岡市）



荒船風穴（下仁田町）

果たしています。登録運動が始まった当初は、理解者は決して多くはありませんでした。そのような中で、世界遺産登録を応援してくれる県民団体が複数立ち上がり、世界遺産や個々の資産の価値を伝える解説活動を支えてくれたのです。その丁寧な解説により、「富岡製糸場と絹産業遺産群」への理解が深まり、応援の輪が広がっていきました。

「ぐんま絹遺産」の登録制度

また、世界遺産の登録運動と並行して、県では「ぐんま絹遺産」の登録制度をはじめました。群馬県は江戸時代から絹産業が盛んな地域で、養蚕・製糸・織物・その流通に関わる建物や史跡、民俗芸能など数多くの絹遺産が各地に残っており、現在も養蚕・製糸・織物の産業が脈々と受け継がれ

ています。これらの絹遺産を誇るべきものとして世界遺産と同様に保存し活用していこうと考えたのです。「ぐんま絹遺産」は現在までに84件が登録されています。

日本中で絹産業が盛んだった明治から昭和にかけて、多くの人々がそれらの産業に従事していました。その努力が結集し日本の生糸が世界一となったのです。各地に残る絹遺産は私たちの身近な諸先輩方の努力を伝えるものであり、さらにそれを世界に伝える代表として「富岡製糸場と絹産業遺産群」があるのです。

今後の取り組み―絹文化の継承

世界遺産登録が決定して以降、富岡製糸場をはじめ各資産では来訪者がさらに増加し、日本中の人々の注目を集めています。よく言われることですが、世界遺産登録はゴールではなく、その保存・活用に向けた新たなスタートです。「富岡製糸場と絹産業遺産群」を後世に伝えるためには、世界遺産登録による今の関心の高さをいかに持続させるかが重要だと考えています。

そのために、世界遺産「富岡製糸場と絹産業遺産群」と「ぐんま絹遺産」をうまく連携させ、群馬県は「絹の国」であると、多くの人々に認知していただくための取り組みを始めています。身近に世界に誇れる絹文化があることを知り、地域に愛着と誇りをもってもらうことが、世界遺産の継承と魅力ある地域づくりにつながると考えるからです。そして願わくは、全国各地の絹遺産とネットワークをつくり、共に日本の絹文化を後世に伝える取り組みができればと思っています。



全国地域リーダー養成塾に 育てられて

元岐阜県白川町長 ● 今井良博

私は平成3年に、町職員として公務で東京へ出かけることなど殆ど（ほとんど）無かった当時、2泊3日年6回の東京研修（講師は在京の一流大学の先生方）と海外研修もある「全国地域リーダー養成塾」第3期生として幸運にも派遣・参加させてもらいました。多額の派遣費用もかかるこの研修に私の派遣を決めていただいた上司の方々や、当時の田口町長には心から感謝しております。当時はふるさと創生事業「ふるさと創生1億円」効果で、全国で町おこしが求められました。全国一律の町おこしが行われる中で、主任講師の法政大学教授清成忠男先生（後に総長）が、「ワインはドイツ、フランス産に限る。日本中で変なワインを造って、人に押し付ける。村おこし三種の神器『みそ』『つけもの』『ワイン』ではダメだ!」と言われたことが強く印象に残っています。

ゼミでは東京女子大学教授（故）伊藤善市先生にご指導いただきました。伊藤先生にはご自宅までご招待をいただき、奥様の手料理で一杯飲んだことは今も忘れません。

海外研修では、初めてのヨーロッパの旅を経験できました。引率はリーダー塾塾長（東京工業大学教授）阿部統先生が行われ、ロンドン、オスロ、ドイツロマンチック街道、スイス、イタリア（ミラノ大聖堂）、フランス（ルーブル美術館）を観光ではなく、要所で阿部先生の手配された方々から説明が聞けるとい一般の旅行では絶対できない充実したヨーロッパ研修でした。特にドイツでは日本人として心から歓迎してもらっている印象を持ちました。阿部先生にはスイスのルツェルンの瀕死のライオンの碑の前でいろいろと教えていただきました。阿部先生は元気でおられ90歳を超えられましたが、私は時々ご自宅を尋ね、今でも相談を聞いていただいています。

私は白川町で、町おこしのためのクオーレ塾の事務局

を担当していました。その当時の塾生はそうそうたるメンバーで、今でも「せせらぎネットワーク」として活躍しています。年間10回程度の研修と国内旅行を行うものでした。塾長はあさま山荘事件でも活躍された聖心女子大学教授（故）島田一男先生で、クオーレという言葉も先生に付けてもらいました。

今も白川町の町おこしの拠点の一つですが、当時の大正河原キャンプ場をふるさと創生資金でコテージ村、観光道路、イタリア館、クオーレの森など大投資を行い、全体の名前を「クオーレふれあいの里」とし、私は初代事務局長でがんばりました。まわりからは武家の商法ですぐつぶれるなどと揶揄（やゆ）（やゆ）されましたが、残念ながら今もすっかり白川町をPRしています。

リーダー塾卒業後、クオーレふれあいの里事務局長等を終え、平成9年9月に47歳で白川町長に就任し、4期16年間をやっと勤め昨年9月退任しました。今、64歳になり老人の仲間に入りました。若い時に、老人に頑張ってもらい町おこしをと言ってきましたが、いざ自分が老人になるとなかなか思うようになりません。おそらく老人には、強い老人と弱い老人があり、元気な老人には活躍してもらうのですが、社会保障、医療、年金の問題で、弱い老人をどこまで見守るのが、これからの課題だと思います。

地域リーダー養成塾には、町長就任以来、毎年研修生を送ることができ、白川町役場には現在17名の修了生がいます。当地は、日本一の町おこし・村づくりそして、日本づくりの第一人者である現在のリーダー塾塾長（東京大学名誉教授）大森彌先生に大変お世話になってます。人と人とのネットワーク、そして「一杯飲もうまいか」の仲間は本当に大切な人だと思うこのごろです。全国の修了生の皆さん、がんばってください。

特定地域の住宅に太陽光パネルを集中設置 「屋根貸し」で発電事業を推進

神奈川県産業労働局
エネルギー部地域エネルギー課長

● 山田 健司

再生可能エネルギーの普及を促進

神奈川県では、平成23年3月に発生した東日本大震災における原子力発電所事故による電力需給の逼迫を受け、「かながわスマートエネルギー構想」を提唱し、平成25年7月には、「神奈川県再生可能エネルギーの導入等の促進に関する条例」を制定、同条例に基づく計画として、「かながわスマートエネルギー計画」を策定しました。

本計画ではスマートエネルギー構想で掲げた「原子力に過度に依存しない」、「環境に配慮する」、「地産地消を推進する」という三つの原則を踏襲し、再生可能エネルギーの普及拡大を図っていくこととしています。

こうした中、本県では、地域的偏在や設置場所の制約が少ない「太陽光発電」の普及が最も有望視されることから、その普及に重点的に取り組んでいます。

複数住宅の「屋根貸し」による太陽光発電設備設置事業

(1) 経緯

メガソーラーの適地が少ない本県において太陽光発電の普及を図るためには、住宅や工場等への太陽光パネルの設置を拡大することが重要になります。そこで、県民の皆様により、ズナブルな価格で太陽光発電設備を設置していただくため、事業者から一定の要件を満たす太陽光発電設備設置プランを募集し紹介する「かながわソーラーバンクシステム」等の施策を実施してきました。

しかし、依然として初期投資が必要であることから、初期投資が不要な「屋根貸し」方式による太陽光発電事業の普及に取り組むことにしました。これは、施設所有者が、発電事業者が屋根を貸し、発電事業者が自己の費用と責任において太陽光発電設備を設置し、賃料を払うというスキームです。

これまで、県有施設における「屋根貸し」を皮切りに、民間の事業所や工場における「屋根貸し」普及施策（「屋根貸し」マッチング事業）を展開してきましたが、この取り組み

みを住宅に広げたものが、「複数住宅の『屋根貸し』による太陽光発電事業」です。

(2) 事業の概要

住宅における太陽光発電設備の平均的発電出力は4^{キロワット}程度であるため、全量売電が前提となる「屋根貸し」を実施するためには、複数の住宅に設置し、10^{キロワット}以上にする必要があります。また、発電事業の採算性を確保するためには、特定の地域に集中的に設置することが望まれます。

そこで、本事業では、まず、集中的に設置する地域を公募しました。さらに、住民の方に、より魅力的な「屋根貸し」プランを提供するため、プランを公募するとともに、採択したプランの実施経費の一部について、補助金（上限1400万円、50戸想定）を支出することとしました。その結果、実施地域については、綾瀬市早川城山住宅地に決定、また、横浜環境デザインが提案したプランを採択しました。

(3) プラン概要

採択したプランの概要は表のとおり

【プランの概要】

※（ ）内の金額は、4kW設置した場合、住民が受け取る賃料等の推計額

	契約締結時	賃貸借契約中の賃料	合計
パターン1	一時金（受け取り） 4万円×設備容量 (16万円程度)	13年目～20年目 (8年間) 売電料の6割 (64万円程度)	(80万円程度)
パターン2	一部負担金（支払い） 6万円×設備容量 (△24万円程度)	1年目～20年目 (20年間) 売電料の4割 (114万円程度)	(90万円程度)
パターン3		14年目～20年目 (7年間) 売電料の10割 (95万円程度)	(95万円程度)

りです。住民の方は三つのパターンから選んで、賃貸借契約を締結することができます。なお、20年間の賃貸借期間終了後は、住民の方の選択に従い、現状回復（撤去）又は発電設備の無償譲渡がなされます。

今後の展開

今後、実施地域においてプランの普及を図り、ビジネスモデルとして成り立つか検証を行います。補助金がなくとも十分に成り立つことが検証できた場合、全県的な展開を図り、神奈川県から複数住宅の「屋根貸し」による太陽光発電事業の普及を図っていきたいと考えています。

地域コミュニティの再生

八王子市の中心市街地と郊外住宅地から「コミュニティ再生術を学ぶ」

大妻女子大教授 ● 炭谷 晃男

地域活性化センターでは、地域再生の担い手となる人材の養成を目的としたワークショップ「地域再生実践塾」を実施している。7月上旬に東京都八王子市で開催された今年度第1回実践塾の内容について、主任講師の炭谷晃男大妻女子大教授にご報告いただいた。

(地域支援課)

はじめに

今回の八王子市における地域再生実践塾においては、「地域コミュニティの再生」を基本テーマとして、市内のさまざまな実践事例を紹介した。地域的には、中心商店街地域と市郊外の住宅地の事例を取り上げ、また再生の手法としては、①町会型、②NPO型、③町会とNPO協働型、などによる再生術を学んでいた。八王子市では地域の個性、社会的資源をうまく活用することによって、地域コミュニティの再生活動に取り組んでいる。

第1日目…特別講演 パネルディスカッション

まず、行政の立場から八王子市協働推進課の岩崎隆浩課長補佐が同市におけるコミュニティの現状について講演。この中で岩崎氏は、市制施行から100周年を迎えようとしている八王子市は、人口56万人の多摩地区の中核都市で、21の大学を抱える学園都市として、市民力を活かした市民協働のまちづくりをいれ、2015年4月から中核市に移行すると説明した。町会は564団体、加入率は61・36%。NPO法人の数も274団体と多摩地域では最も多いと報告した。

「NPOフュージョン長池」理事長の富永一夫氏は「NPOによるまちづくり(多摩ニュータウン)も多様で美しい共生の公園づくり」と題して講義。1999年に同NPOを設立し、長池公園の指定管理者になるまでの経緯について説明。同NPOが「人組」↓「地域組」↓「多摩ニュータウン組」へと進化を遂げていることを説明しつつ、その過程で、ヒト、モノ、カネ、情報の多様性を確保することが活動の持続可能性の確保につながると強調した。また、この春から八王子東部地区の152の公園を管理する指定管理者となり、さらに事業展開を図っていることが報告された。

次に、八王子市中心市街地と郊外住宅地で活動している3団体を含めパネルディスカッションを行った。トップバッターとして中心市街地で女性靴専門店を営まれている小保能範氏が「アーティストが活動する木造民家の活用とデザイン会社『TRUCKY』について」と題して講演し、以下のような報告を行った。それによると、八王子駅南口には個性的な店があるが、商店街を形成していなかった。その一角の空き家を拠点に「お店よろし塾」という商店主を対象とした経営塾を運営。2009年3月に東京造形大学を卒業した中村文子さんのデザイン会社の起業を支援し、「TRUCKY」が誕生した。若い店主に設立パーティーの案内を出し、パーティーを通じてデザインの効用を広め、仕事につな

げることができたという。東日本大震災後は飲食店のお客減少を受けて、ハロウィンの時期に「個性ある店にピッタリな客層」を狙い撃ちする「ハニーズガーデン」を企画した。店内でアートの展示やコンサートを行い、アーティストが集まるまちの楽しさを体験できるイベントは活性化の効果が大きいと報告した。

「きよぴー&とまと、Yout&」事務局の片貝剛氏は清川町の住宅地でのコミュニティビジネス事業について報告。「きよぴー」という地域団体と配食サービスの「とまと」が合流。①配食サービス、②高齢者の生きがいづくり、③次代を担う子どもたちの支援を柱に2006年3月に「きよぴー&とまと」として活動を開始した。

「必要なことを、できる範囲で、できるときにやる」を合言葉に、半径500mの範囲を対象として活動を展開。配食サービス活動の主軸である惣菜の販売、配食サービス、サロン活動には、主婦を中心に約120名の会員が週1回又は月に1回の割合で参加している。

高齢者支援では、閉じこもりがちな高齢者同士の交流を深めるため、高齢者に関係のある施設の見学のほか、「地域あんしん支援センター」から講師を招いての講習会や健康体操などを実施。また思い出のレコー



フィールドワークの様子（トリッキー）



グループワークの様子

平成 26 年度第 1 回 地域再生実践塾の概要

<日 程>

第 1 日 平成 26 年 7 月 3 日（木）

Lecture 1 「総論・問題提起」

主任講師：大妻女子大学社会情報学部教授 炭谷 晃男 氏

Lecture 2 「八王子市におけるコミュニティの現状」

特別講師：八王子市協働推進課長補佐兼主査 岩崎 隆浩 氏

Lecture 3 「NPO によるまちづくり（多摩ニュータウン）」

特別講師：特定非営利活動法人 NPO フュージョン長池

理事長 富永 一夫 氏

Lecture 4 パネルディスカッション「コミュニティ再生のための地域経営」

【コーディネーター】

炭谷 晃男 氏

【パネリスト】

富永 一夫 氏（特定非営利活動法人 NPO フュージョン長池理事長）

小俣 能範 氏（うさぎや株式会社代表取締役）

片貝 剛 氏（きよぴー&とまと、You&I 事務局）

佐藤 英二 氏（特定非営利活動法人からまつ理事長）

Lecture 5 「振り返り、まとめ、フィールドワーク説明」

主任講師：炭谷 晃男 氏

第 2 日 平成 26 年 7 月 4 日（金）

Field Work 「活動現場の視察」

- ・配食サービス、子ども支援（きよぴー&とまと、You&I）
- ・学童保育から高齢者支援（特定非営利活動法人からまつ）
- ・中心市街地の空き店舗の活用（有限責任事業組合トリッキー）

Group Work 1 「視察結果のまとめ・意見交換」

主任講師：炭谷 晃男 氏

Group Work 2 「グループ発表・講評」

主任講師：炭谷 晃男 氏

「総括」

主任講師：炭谷 晃男 氏

ドや映画の集いを開催し、音楽を聴いたり、映画を見たりしながらおしゃべりすることが若返りにも役立っているという。子ども支援では、川遊び、芋ほり、和風風作りなどを年に 5 回実施。子ども支援活動は、地域における 3 世代間交流のきっかけにもなっている。

最後に、市郊外に位置する川口町の唐松町会と「NPO 法人からまつ」について町会長、そして NPO 理事長でもある佐藤英二氏が町会と NPO 活動の連携について講演。この中で同氏は「唐松町会は、50 年の歴史をもつ町会（世帯数 883）です。

しつかりとした町会がありながら NPO 活動をはじめたのは理由がありました」と指摘したうえで、次のような経緯を説明した。

それによると、仕事を持つ親御さんの切実な願いを唐松町会が受け止め、昭和 62 年、八王子市から補助金を受け、民設民営の自主学童クラブをスタートさせた。「地域の子どもは地域で見守る」。これがモットーになっている。その後、市は学童保育所の公設化を基本とした指定管理者制度を導入した。自主学童クラブを公設民営の「市立学童保育所」とし、その運営を受託するためには、

NPO 法人を設立することが必要となった。このため平成 18 年に「特定非営利活動法人からまつ」を設立し、平成 19 年に「八王子市立からまつ学童保育所」の指定管理者として受託するに至った。

町会では受託できない事業は指定管理者の「NPO 法人」が担い、一方で「NPO 法人」は、町会組織の協力を得て事業を行う。お互いの組織が支え合い、補完し合う関係になっているという。現在、NPO は「子育て支援事業」として四つの学童保育所、つどいの広場事業、放課後子ども教室を運営。「思いやり事

業部」は高齢者ふれあい事業、就労継続支援 B 型きずな工房からまつを運営。「施設管理事業部」では斎場清掃、施設・家事支援事業を行っている。

2 日目：フィールドワークとグループワーク

フィールドワークは、前日パネルディスカッションでお話していた、①中心市街地のデザイン会社「TRICKY」、②郊外住宅地のきよぴー&とまと、③NPO 法人からまつ、の 3 カ所を 3 台のバスに分乗してトライアングル・ツアーを実施した。

午後からのグループワークでは、2 日間にわたる研修成果を踏まえて、①町会活動の活性化、②NPO 活動の活性化、③町会と NPO 活動の連携、の 3 つのテーマに分かれて、グループワークを行い、その成果を発表していただいた。

おわりに

「人とひと、人と自然が響き合い、みんなで幸せを紡ぐまち八王子」の市民力を活かした市民協働のまちづくりの一端を紹介した。今回のセミナーが、少しでも皆様のお役に立てばと願いつつ、ヒト、モノ、カネ、情報という地域資源をうまく生かし、地域コミュニティの再生に取り組んでおられる皆さんにエールを送りたいと強く思っている。

魅力的な「ふるさと体験」を提供 和歌山電鉄沿線の活性化で多彩な事業

山東まちづくり会会長

湯川 正純

都市から地方への移住・交流は、人口減少社会における地域活性化策の柱として期待される。地域活性化センターでは、「移住・交流による地域活性化支援事業」として、地域団体もしくは市町村等が自主的・主体的に実施する、都市住民などを受け入れる事業を支援している。今回は平成25年度に同事業を活用した和歌山市の取り組みを「山東まちづくり会」会長の湯川正純氏にご紹介いただいた。

(企画・コンサルタント業務課)

豊かな自然と 便利な交通アクセス

和歌山県の玄関口に位置する和歌山市東部の山東(さんとう)地域は、自然豊かな里山と良好な住環境、伊太祁曽(いたきそ)神社をはじめとする由緒ある神社仏閣、家族で自然に触れ合うことのできる「四季の郷公園」などを有する地域である。さらに、和歌山市の東西を貫く交通インフラとして「たま駅長」で有名な

和歌山電鉄があり、JR和歌山駅に直結。このため大阪や関西空港へのアクセスにも恵まれている。

和歌山電鉄維持と沿線の活性化、 大きな課題に

近年、和歌山市東部の交通インフラの大きな要である和歌山電鉄貴志川線が、若年層の流出、人口の自然減少や少子化の影響で、乗車人数が伸び悩み、存続の危機に陥った。このため沿線住民は鉄道ファンの

掘り起しを進めるなど存続運動を展開。この結果、「たま駅長」や「いちご電車・おもちゃ電車・たま電車」などのアイデアも生まれ、今では有名な地域鉄道として海外からも観光客が訪れるまでになっている。

しかし、和歌山電鉄貴志川線の経営は安定した軌道に乗ったわけではなく、今後も地域の人口減少が続くことが予想される。こうしたことから、和歌山電鉄の乗客増加や沿線地域の活性化、さらには近隣他府県に住む人々から沿線一帯が「チふるさと」と

して認知されるような取り組みを進め、それらが相乗効果を上げるようにすることが大きな課題となっている。

様々な事業を展開

「竹燈夜」「コスモス・シシバガーも

そこで、平成25年度に一般財団法人地域活性化センターの助成事業「移住・交流による地域活性化支援事業」の採択を受けて、和歌山電鉄沿線地域の活性化に向けた様々な事業を実施した。

一つ目の事業は「竹燈夜」四季の郷」である。

このイベントは和歌山市のランドマークの一つとして広く市民から親しまれている「四季の郷公園」を会場として夏に実施した。駅から会場までのアクセスロードに提灯100



竹燈夜。闇に浮かぶ竹燈籠の明かりは幻想的な雰囲気を出した



コスモスの植栽作業の様子



(上) たけのこまんシシバーガー
(左) 山東まちづくり会 湯川正純会長

個を吊るすとともに、竹燈籠1万個と、子供達が絵を描いたコップとキャンドル計1万個を設置。夕暮れとともに灯がともされ、幻想的な空間がつくり出された。

このイベントには約4000人が来場。地域住民同士の絆が深まる一方、お客様達との交流も進み、大きな成果を上げることができた。今後「和歌山市の夏祭り」として成長していくことが期待される。

二つ目の事業は「コスモスの植栽」。

和歌山電鉄沿線では、耕作放棄地が顕著になってきているため、コスモスを植え、乗客に和んでもらえる

車窓からの景観づくりを行った。

植栽のために7月ごろから県内の小中学校で種から育てたコスモス3000株を、和歌山電鉄と並行に流れる和田川の堤防約600mに植栽した。一般参加のボランティアや地区住民が一緒になって作業にあたり、通り過ぎる電車で笑顔で手を振りながら苗を植えていった。コスモスの植栽作業を通じ、世代間交流・地域間交流が深まり、参加者から高い評価を得ることができた。

三つ目は「案山子（かかし）めぐりとハイキングコースの案内板設置」事業。

秋の収穫が終わった後も自然豊かな

な里山の散策を楽しんでもらおうと、「案山子づくり教室」を開催し、教室参加者が作成した案山子を伊太祈曽駅から四季の郷公園まで約2kmの沿道に設置して「案山子めぐり」コースとした。

一方、地域の観光資源掘り起こしとして、山東地区を南北に縦貫する熊野古道のほか、「四季の郷公園」「伊太祁曽神社」「足神社」といった市内の名所を組み入れたハイキングコース（約8km）を新たに設定し、四季の郷公園に案内板を設置した。多くの住民からは、「地元に新たな魅力が加わり、また魅力の再発見にもつながった」と好評を得ている。

四つ目の事業が「食ブランドプロジェクト」である。

和歌山電鉄沿線、とりわけ山東地区は筍（たけのこ）が有名だ。気候が温暖なため3月から出荷でき、赤土で育った筍は柔らかくおいしいと評判だが、4月になり、ほかの地域でも出荷されるようになると、価格が維持できなくなり加工品へと回される。

そうした加工品に一工夫を加えブランド化を目指すことにし、創作レシピ作りを計4回開催。地元産品の特徴を把握するとともに、ほかの地域の品との差別化を図った。

こうした取り組みの結果生み出さ

れたのが、ご当地バーガー「たけのこまんシシバーガー」だ。「たけのこまん」は地元のキャラクターだが、筍とその天敵イノシシの肉を味付けしてバーガーで閉じ込め、表面に「たけのこまん」の焼印を押し、ブランドの証とした。イノシシ肉の食べ応えと筍の食感、ヘルシーさが高評価を受けた。

「魅力あるふるさと」を創生 リピーター確保めざす

今回の移住・交流事業を通して感じたことは、観光は視覚と味覚を競うことが多いが、それだけだと1回で飽きられてしまうということである。

五感を通して体験、参加して得た感動は思い出として長続きし、もう一度「プチふるさと」を訪ねたい、癒されたいとの思いがリピーターとなり、また受け入れる地域は誇りと自信を甦らせる。

これからの地域づくりは、来訪者のニーズをくむことのできるコーディネート者を育て、地域リーダーのもと「魅力あるふるさと」の創生に向けた取り組みを一步步つ進めていくことが必要である。

そして和歌山電鉄沿線を、思いっけずに行ける「プチふるさと」として発信していきたい。

住民主導の魅力ある郷土づくり

震災復興や観光振興、「自らの地域は自らの手で」

岩手県久慈地域は、岩手県沿岸北部の久慈市、洋野町、野田村、普代村の1市1町2村からなり、この一帯は、漁業の盛んな地域であり、ウニ、アワビ、ホヤなどをはじめとする豊富な海の幸で有名である。

太平洋に面していることもあり、海洋性気候と内陸性気候の両方の特徴を併せ持つが、夏はヤマセ（偏東風）の影響を受けることが多く、平均して比較的冷涼な気候の地域である。

る。

今回はここ久慈地域で、岩手県や久慈地域の市町村などの行政区の壁を越えるとともに、NPO法人などの他の民間団体とも連携して地域活性化の取り組みを行っている「特定非営利活動法人 やませデザイン会議」の活動について、事務局長の川代明寛（かわだい・あきひろ）氏のお話を交えて紹介する。

「やませデザイン会議」の設立

やませデザイン会議（平成4年4月設立）の設立当時、久慈青年会議所では、40歳で青年会議所を引退した後に地域づくりに関わる場がなく、OB達が活躍できる場が求められていた。一方で、同青年会議所では広域連携を模索していたという。

そこで同青年会議所の会員やOB、それに久慈広域商工会青年部が連携して、地域住民が行政区の壁を

越え、地域の活性化をめざす「やませデザイン会議」を立ち上げた。同会議には「地域をもっと元気にしたい！」との熱い思いを持つ多くの人々が参加した。

こうして設立された「やませデザイン会議」の特色は、その活動の幅が広いことだ。

一つの事業に特化した団体ではなく、地域の課題を見つけ出し、地域住民で議論し解決する団体であるため、取り組む事業は時代により変化がある。設立当時には、岩手県北部に空港を造ろうと取り組んだり、協働に力を入れたり、観光に力を入れた時期があったりと、その時々、地域に必要とされている様々なことに柔軟に取り組んできた。現在では、その活動範囲はさらに広がりをみせ、県や市町村の事業を受託できる団体となり、地域住民と行政をつなぐ地域づくり団体として、なくてはならない存在となっている。



やませデザイン会議の例会の様子

震災復興など様々な活動内容「あまちゃん」ロケ地ガイドも

やませデザイン会議は、久慈地域の各市町村長が顧問として参加しているユニークな団体であり、また同地域ではNPOの法人格取得第1号の団体として、名実ともに地域づくり団体の先駆者的存在である。事業は新しいものにも果敢に取り組むため、多岐にわたっているが、主なものは以下の通りである。

（１）施設の管理運営（ジヨブカフェ久慈管理者、久慈市勤労青少年ホーム指定管理）

★団体プロフィール★

設立年＝平成4年4月

設立・運営主体＝特定非営利活動法人

代表者＝議長 細田 勝利

構成員＝51人

〈連絡先〉

〒028-0051

岩手県久慈市川崎町13番1号

電話：0194-61-3229

岩手県からの委託事業としてジョブカフェ久慈の管理運営を行っているほか、指定管理者制度により久慈市勤労青少年ホームを管理運営しており、普段から県民・市民との関わりがある。

(2) 東日本大震災復興事業（三陸鉄道支援事業Ⅱつながるんだるま、さんてつ・北リアス緑市Ⅱ、今日から80（ハジマル）復興イベント等）

東日本大震災の前から三陸鉄道を地域のシンボルとして位置づけ、支援をしていたが、大震災以後は、震災被害を受けた三陸鉄道の復興に向



三陸鉄道全線運行再開オープニングセレモニーの様相

け、それまで以上に精力的に三陸鉄道沿線で様々なイベントを開催。

三陸鉄道が復旧し、全線開通した際に行われた全線運行再開オープニングセレモニーでは、駅のホームに入りきらないほどの地域住民が参加する勢いのあるイベントを行った。

(3) 中間支援NPO

久慈市勤労青少年ホーム内にある「やませデザイン会議」の事務局に久慈地域市民活動支援室を設け、NPOやボランティアなどの市民活動をサポートしている。最近では、近隣の高校へ出張講座を行い、若い世代の育成も図っている。



「あまちゃん」ロケ支援事業。市民エキストラ

(4) 観光振興事業（あまちゃんガイド）

やませデザイン会議が、大ヒットしたNHKの連続テレビ小説「あまちゃん」のロケ支援を行っていたことから、久慈市より観光客受け入れ事業を受託し、「あまちゃん」のロケ地、小袖海岸海女センターで無料ガイドを行っている。ロケ地を訪れる観光客を「おもてなしの心」で迎え、観光客にはとても好評だ。

また「あまちゃん」以後の地域づくりへの取り組みとして、セミナー「あまちゃんをブームで終わらせない！」を開催するなど積極的に地域への関わりを見せている。

今後の展望 「あまちゃん」後を見据えて

「あまちゃん」のヒットで三陸鉄道沿線を含め久慈地域は観光地としてクローズアップされているが、今後は次を見据えた活性化策も大きな課題だ。

そこで前述のようなセミナー開催など新しい取

り組みも始めているが、川代事務局長は「『あまちゃん』ロケ支援等を通して学んだことは、地域づくり活動で重要なことは観光客をいかに呼ぶかではなく、最終的にそこに住む住民たちが満足して住み続けられるよう、活動を通して地元愛を育んでもらうことだ。そのためには、多くの地域住民に当団体の活動を理解し、また参加していただき、地域に對して愛着を持っていたきたい」と語る。

そして今後も「自らが住む地域を自らの手でより良いまちに」をモットーに、やませデザイン会議は地域に根差した活動を行っていく考えだ。そのためには、地域間のコミュニケーションを現在よりも積極的にとり、久慈地域の各市町村で課題が生じた際には素早く察知できるようになりたいという。

また、近隣の高校を対象にNPOに関する出張講座を行っているが、こうした人材育成にも力を入れる方針だ。

地域の課題を自ら見つけ、解決する地域づくり団体であるやませデザイン会議が今後どのような活動を展開していくか、これからも注目していきたい。

『創造農村』 過疎をクリエイティブに生きる戦略



佐々木雅幸・川井田祥子・萩原雅也 編著
学芸出版社（2014年3月1日発行）
定価：3000円＋税

本書の「創造農村」とは「創造都市」からヒントを得た新たな言葉であり、創造都市という概念が十数年で世界中に広がったことと同様に、創造農村も今後普及する言葉であると思われる。

創造都市が、現代アートの持つ創造的な作用を、まちづくりや新産業の創出に役立たせようという新しい都市ビジョンであるのに対し、創造都市という考えを農村に適用させ、自然と人間の創造性に注目するのが「創造農村」である。これまで計3回実施されている「創造農村ワークショップ」では、農山漁村のみならず創造都市を推進する大都市や地方都市にも、「創造農村」の取り組みが大きな刺激を与えている。

本書は2部構成となっており、第1部は、「創造農村」に関する総論であり、その理論的系譜やキーワードについて、事例を踏まえて述べている。

第2部は、「創造農村」の先端的事例を取り上げて、その最新動向を分析し、課題を掘り下げている。

また、第14章では、2013年8月に長野県木曽町で開催された第3回創造農村ワークショップでのシンポジウムから、創造農村を推進するリーダーたちの発言を取りまとめ、その熱い思いを紹介している。

本書は、全国各地で創造的な地域づくりを進める住民、NPO、自治体関係者にとって展望と勇気を与えてくれる1冊である。

『地域自治組織等における人材の活用に関する研究会報告書』（平成25年度）



一般財団法人 自治研修協会 編集
（2014年3月発行）

地方分権改革が進展する中、「地域の課題は、地域住民が自ら考え、解決する」という考えの下、住民主体の地域自治組織等が形成され、行政と役割分担しながらの地域づくりが全国各地で展開されている。

一般財団法人自治研修協会では、有識者による研究会『地域自治組織等における人材の活用に関する研究会』を設置して、地域自治組織等の現状把握、制度的・組織的な課題とその解決に向けた取り組み、活動を担う人的側面といった点に注目した調査研究を行った。

本書は、こうした調査の結果とその分析をとりまとめたものである。

第1章では、研究会委員である首都大学東京大学院社会科学部の大杉寛教授が、地域資源、地域人材、地域ガバナンスといった次元から、地域づくりと地域自治組織について論じている。

第2章では、地域自治組織等の事業を地域活性化に繋げている自治体や、地域自治組織等に職員や職員退職者が参加している自治体等、6自治体を対象に行った現地調査について詳細な調査結果が記載されている。

第3章では、首都大学東京の大杉寛研究室を委託先として実施された補完的な調査研究についての報告が記載されている。

終章では、平成25年度調査のまとめと次年度以降の調査研究にあたっての課題について述べられている。

本書は、地域の課題を解決していくために、今後ますます重要な位置を占めていく地域自治組織等を考える一助となる1冊である。



倉敷市長 ● 伊東香織

都市間競争から都市間連携へ

倉敷市は、人口約48万人で、岡山県の南部に位置し、瀬戸内海に面しています。瀬戸内特有の温暖な気候に恵まれていることや、災害が比較的小さいことから、移住先としても注目されています。

本市は都市形成の過程において、昭和42年の3市の対等合併を皮切りに、隣接町村との合併により市域を拡大してきたため、それぞれの地区が文化、歴史、産業、自然など、特色ある個性と魅力を持っています。

JR倉敷駅周辺は、大型商業施設や商店街、サービス業などの都市機能が集積し、中核市倉敷市の玄関口となる一方、いわゆる美観地区を中心に歴史的町並みが残り、年間344万人の方に訪れていただいております。現在、官民が協働して景観の保全に努めるとともに、町屋の再生・活用などを通じて新たな賑わいの創出にも積極的に取り組んでおり、平成24年には、アジア都市景観賞大賞を受賞しました。

さらに、瀬戸内海の景勝地として有名な鷺羽山^{わしゅうざん}周辺では、本年、日本最初の国立公園に指定されて80周年を迎え、様々な記念事業が実施されており、多くの観光客で賑わっております。

産業では、市の沿岸部に、我が国屈指の臨海工業地帯である水島コンビナートが立地し、さらに、新たな港湾物流の拠点として玉島ハーバーアイランドの整備が進められています。また、市の南東部の児島地区は、古くから繊維産業が盛んで学生服の生産では全国1位、最近では、国産ジーンズ発祥の地として、全国に、また、世界に向けてPRを行っております。このほかにも、市西部の丘陵地帯を中心とした地域は、マスカットやピオーネ、白桃、スイートピーなどの高級農産物の産地として知られており、「果物王国 岡山」の重要な一角を担っております。

さて、去る5月に、「日本創成会議」の人口減少問題検討分科会から、このまま地方から大都市への人口流出が続いていけば、2010年からの30年間で、約半数の市区町村は、人口維持が困難となり「将来消滅する可能性がある」との試算が公表されました。さらに、平成27年度から施行される改正地方自治法では、自治体同士が連携して事務を処理する「連携協約」制度の創設が盛り込まれております。

こうした状況を踏まえると、地方においては個々の都市間の競争から、都市間の連携へ大きく舵を切る時期が来ているものと思われます。

本市では、県内を流れる一級河川「高梁川^{たかはしがわ}」の恩恵を受ける流域自治体と共に、昭和29年3月に「高梁川流域連盟」を設立し、圏域全体の文化向上に寄与する取り組みを行ってきました。こうした流域を軸とした自治体間の自発的な繋がりは全国唯一のものであり、今年3月には創立60周年を迎えることができました。平成25年10月には、流域7市3町の首長・議長が一堂に会する60周年記念サミットを開催し、圏域の更なる活性化のため、連携をより強固なものとし、まちづくりにかかる課題解決に共同で取り組むサミット宣言を行ったところです。

このように共通の歴史的視点や地理的視点などにより繋がることで、その圏域全体として大きな「力」を得ることができると思います。その「力」とは、単に規模による経済的な利点といった点に留まらず、個々の自治体や地域が持つ強みの部分を集積した、「総合力」と呼べるものではないでしょうか。

今後、本市では、このサミット宣言の趣旨を踏まえ、また、地方中枢拠点都市としての役割を十分認識し、流域市町と協議しながら圏域全体の経済成長や文化発信を目指す新たなビジョンを策定し、圏域全体の発展に尽くしてまいりたいと考えております。



世界文化遺産を大阪に
百舌鳥
古市古墳群



百舌鳥・古市古墳群世界文化遺産登録推進本部会議（大阪府・堺市・羽曳野市・藤井寺市）

田園理想郷® 川場村



■ 黄金色の田園風景 夏は新緑の稲、秋は黄金色に輝く稲穂により村内に四季折々の風景を形成する

川場村は、群馬県北部の武尊山の南麓に広がる自然豊かな農山村です。村内には、村名の由来となる薄根川（うすねがわ）をはじめ4本の一級河川を含む7本の川が流れています。また川場温泉など六つの温泉が古来より村を潤しています。

村は、主産業である農業に観光と環境を組み合わせた村づくりを推進しています。このうち農業関係では、こんにゃく、果樹（りんご・ブルーベリー・ぶどう等）、米を中心に栽培しており、特に米については、川場産コシヒカリ「雪ほたか」の名称でブランド化されています。

一方、観光面では、道の駅である「川場田園プラザ」に年間100万人前後の観光客が訪れます。園内には、農産物直売所の「ファーマーズマーケット」や、摘み取り体験ができるブルーベリー公園等があり、道の駅全体が「農業＋観光」を体現した観光拠点となっています。



■ 川場まつり みこし大行進や和太鼓演奏、大抽選会等のイベントが催される、川場村の一大イベント。フィナーレを花火により締めくくる。毎年7月に開催



■ 「雪ほたか」 選ばれた生産組合のもとで育てられたコシヒカリは、「全国米・食味分析鑑定コンクール」で7年連続金賞を受賞している



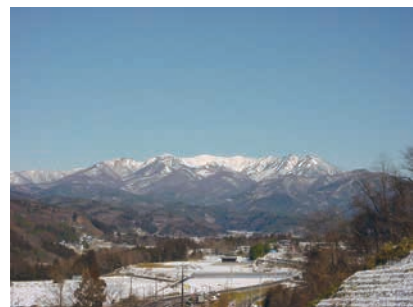
■ 上州武尊山スカイビュー・ウルトラトレイル 昨年度まで実施していたトレイルランの大会、「スカイビュートレイル」をリニューアルし、上州武尊山系や未踏の古道を活用した120kmのコースを新設。国内屈指のレベルの大会を実現



■ 道の駅川場田園プラザ オンリーワンのグルメと商品を提供する、家族で一日中楽しめる道の駅として近年人気を博しており、村の観光拠点として位置づけられている



■ 春駒まつり 女装した若者が門前地区内の家々で踊りと唄を披露し、家内安全と養蚕豊作を祈願する伝統行事。毎年2月11日に行われる



■ 上州武尊山 日本百名山の一つである武尊山は、日本武尊（ヤマトタケルノミコト）の伝説と山岳信仰の山としてあがめられている

地域再生実践塾開催のお知らせ

平成 26 年度 地域再生実践塾 第 4 回 佐賀県佐賀市

『地域の資源化プロセスとまちなか再生』

平成 26 年 9 月 25 日 (木) ~ 9 月 27 日 (土)

会場：佐賀市役所 大財別館（佐賀県佐賀市大財 3 丁目 11-21）

通信センター

開催趣旨

昨今、人口流出や経済的環境の変化などにより、地域産業や商店街などの景況は芳しくないところが多く見られます。また、自治体の財政状況も厳しさを増しており、今後どのようにして地域、特に中心部としてのまちなかの浮揚を図るのか、その具体的方策についてはこれからの段階です。地域には、農水産物、自然、歴史、文化などの豊潤な資源があります。これらを生かすことで道は拓けます。そのためには、①地域資源の認識、②人々のつながり形成・意味づけ、③資源の戦略的展開、という「資源化プロセス」を打ち立てることが肝要です。つまり、資源があるとかないとかに拘泥するのではなく、資源にしていこうという姿勢が大切なのです。

今回の講座では、効果的な資源化プロセスを図る上で必要な実践知を育み、まちなか再生にいかしてもらうことを主眼とします。資源展開の先進事例を紹介し、まちなかのフィールドワークを通じて、まちなか再生の具体策を議論します。

【主任講師】



慶應義塾大学
総合政策学部 教授
飯盛 義徳 氏

1964 年佐賀市生まれ。上智大学文学部を卒業後、1987 年、松下電器産業（株）入社。富士通（株）出向などを経て、1992 年、慶應義塾大学大学院経営管理研究科修士課程入学。1994 年、同校修了後、飯盛教材（株）入社。1997 年、常務取締役。2000 年、佐賀大学 理工学部寄附講座客員助教授。また、アントルブレナー育成スクール「鳳雛塾」を設立。2002 年、慶應義塾大学大学院 経営管理研究科博士課程入学。2007 年、同校修了、博士（経営学）。2005 年、慶應義塾大学 環境情報学部専任講師。2008 年、同大学総合政策学部准教授、2014 年、同大学総合政策学部教授、現在に至る。

総務省過疎問題懇談会委員、総務省人材力活性化研究会座長、総務省地域づくり懇談会委員などを務める。

【開催日程】

第 1 日 9 月 25 日 (木)

13:30 ~ 開講式・オリエンテーション

14:00 ~ Lecture1 「総論・問題提起」

主任講師：飯盛 義徳 氏

15:40 ~ Lecture2 「佐賀市の地域資源を活かした観光施策」

特別講師：佐賀市経済部副部長

観光振興課長 国際戦略室長 香月 恭彦 氏

16:40 ~ Lecture3 「子どもの元気とまちなか再生」

特別講師：横尾 敏史 氏

(NPO 法人鳳雛塾 副理事長)

第 2 日 9 月 26 日 (金)

9:00 ~ Lecture4 「"つくる"から"使う"時代のまちづくり」

特別講師：西村 浩 氏（株式会社ワーク
ヴィジョンズ 代表取締役）

11:00 ~ Field Work1 「空き地が資源！わいわいコンテナ」

特別講師：西村 浩 氏

12:00 ~ 昼食

13:10 ~ Field Work2 「恵比須像を活かしたまちづくり」

特別講師：恵比須 DE まちづくりネット
ワーク（市民団体）代表 村井 禮仁 氏

15:30 ~ Group Work1 「地域資源の発掘とまちなか再生」

主任講師：飯盛 義徳 氏

第 3 日 9 月 27 日 (土)

9:00 ~ Group Work2 「グループ発表・講評」

主任講師：飯盛 義徳 氏

11:40 ~ Lecture5 「総括」

主任講師：飯盛 義徳 氏

11:50 ~ 閉講式

■対 象 地方公共団体、商工会、商工会議所、NPO など、地域再生に取り組んでいる方

■募集人員 40 名

■参加費用 無料（開催地までの往復交通費、宿泊費、飲食代などは参加者負担）

■申込方法 申込書を当センターまで送付してください。＊詳しくは、当センターのホームページをご覧ください。

【問い合わせ先】地域支援課 TEL 03-5202-6137

『草屋根保存と地域活性～未来は過去の中～』

平成 26 年 10 月 15 日（水）～ 10 月 17 日（金）

会場：江川小学校旧大内分校（福島県南会津郡下郷町大字大内字宮前 105-1）

開催趣旨

全国各地で、過去から伝承された建物などの保存に取り組み、歴史的個性を活かした地域活性化が図られています。

下郷町大内地区（大内宿）は、江戸時代の宿場の形態を今に残す貴重な地区として、昭和 56 年に、重要伝統的建造物群保存地区に選定されました。この選定を契機に、大内地区の持つ文化資源としての価値が住民に認識されはじめ、伝統的建造物群の保全に関し、住民自らが主体となった取り組みが行われています。景観や文化財の保護を目的とした「大内宿保存会」では、「大内宿を守る住民憲章」を作成し、「売らない、貸さない、壊さない」の 3 原則を住民へ呼び掛けています。茅葺き職人の高齢化や後継者不足による技術継承の問題では、「大内宿結いの会」を結成し、大内宿に伝わる「結い」という相互扶助組織の活用と茅葺き技術を地域で守り継いでいます。

下郷町大内地区における取り組みに学びながら、今後の地域づくりについて考えていきます。

【主任講師】



ゆいでく有限会社
代表取締役
相澤 韶男 氏

1943 年 東京信濃町生まれ、茨城県水戸育ち。
1968 年 武蔵野美術大学建築学科卒業。
1977 年 武蔵野美術大学教員着任。

下郷町伝統的建造物群保存地区保存審議会委員を務める。

日本の古い町を訪ね歩き、大学 4 年の時に大内に出会う。屋並の見事さに心を動かされ、草屋根の保存を村の人に呼び掛け、文化庁にも保存の必要性を訴えた。1981 年の重要伝統的建造物群の指定後もこの集落に深く根を下ろし、「壊さない建築家」として、現在も村づくりに関わっている。

また、1987 年にゆいでく有限会社を設立し、正確な村のくらしの記録を残そうとしている。

主な著書：「大内のくらし ー」「村への提案」「瞬間の遺産 ー」「この宿場、残して！」等

【開催日程】

- 第 1 日 10 月 15 日（水）**
13:30 ～ 開講式・オリエンテーション
13:45 ～ Lecture1 総論・問題提起
主任講師：相澤 韶男 氏
15:10 ～ Lecture2 下郷町の地域振興と大内宿
特別講師：下郷町産業課
16:00 ～ Lecture3 パネルディスカッション
「茅葺き屋根を活かした村づくり」
コーディネーター
特別講師：五十嵐 正俊 氏
（下郷町教育委員会 教育次長）
【パネリスト】 大内地区の皆さん
- 第 2 日 10 月 16 日（木）**
9:00 ～ Lecture4 茅葺きと生活文化
特別講師：吉村 徳男 氏（大内宿結の会 顧問）
10:00 ～ Workshop 茅葺き体験
特別講師：吉村 徳男 氏（大内宿結の会 顧問）
11:00 ～ Lecture5 村の過去から何を学ぶか
12:00 ～ 昼食
13:00 ～ Lecture6 フィールドワークの説明
13:30 ～ Field Work 大内地区の見学
15:30 ～ Group Work1 フィールドワークのまとめ
- 第 3 日 10 月 17 日（金）**
9:00 ～ Group Work2 ディスカッション・発表
11:10 ～ 総括
11:50 ～ 閉講式

- 対 象 地方公共団体、商工会、商工会議所、NPO など、地域再生に取り組んでいる方
- 募集人員 40 名
- 参加費用 無料（開催地までの往復交通費、宿泊費、飲食代などは参加者負担）
- 宿泊 原則、当センターで指定の大内宿内の民宿とさせていただきます。※複数名 1 室での相部屋となります。
10 月 15 日（水）1 泊 5000 円朝食付・夕食は懇親会（別途 3000 円）※懇親会不参加の方は別途ご相談ください。
10 月 16 日（木）1 泊 7500 円夕食・朝食付
- 申込方法 申込書を当センターまで送付してください。＊詳しくは、当センターのホームページをご覧ください。
【問い合わせ先】地域支援課 TEL 03-5202-6137

地域づくり 8 月号

2014 年 8 月 1 日発行 編集・発行＝一般財団法人地域活性化センター
東京都中央区日本橋 2-3-4 日本橋プラザビル 13 階 電話 03-5202-6131（代）<http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp/> 印刷・製本／株式会社太平印刷社

法律で許可された場合以外に本誌からの無断転載を禁止します

落丁・乱丁はお取り替えます。地域づくり情報課（03-5202-6138）まで、ご連絡下さい。

宝くじは、
みなさまの豊かな
暮らしに
役立っています。



宝くじは、図書館や動物園、
学校や公園の整備をはじめ、少子高齢化対策や
災害に強い街づくりまで、いろいろなかたちで、
みなさまの暮らしに役立てられています。